

子どもが生活文化の意味体系を構築する
過程に関する実証的研究

(課題番号 16500471)

平成16年度—18年度科学研究費補助金

基盤研究 (C) (2)

研究成果報告書

平成19年3月

研究代表者 大瀧ミドリ

(上越教育大学学校教育学部教授)

は し が き

本研究は、平成 16 年度から 18 年度の 3 年間にわたって科学研究費補助金を得て遂行されたものである。

子どもにとって遊びは生活そのものであり、遊ぶことにより様々なことを学ぶと指摘されながらも、子どもが遊びを介して生活文化を体得する過程に関する十分な知見が得られていない。そこで、生活を象徴するままごと遊びにおける子どものままごと道具の扱い方に注目することで、子どもが生活文化の意味体系を構築してゆく過程を明らかにする。我々は、生活文化を具現化したものの1つとして物の操作の仕方にそれを見ることができる。本研究では、いろいろな道具を生活目的（例：料理をする、食事をするなど）のために組み合わせ使用できるようになっていくことを、生活文化の意味体系を構築してゆく過程ととらえている。そのため、日常生活における行為をふり行為として表出可能となる、1 歳児を対象に3年間にわたる継続研究を計画する。具体的には、公立保育園の未満児クラスの子どものままごと遊びを3年間にわたり継続的に観察し、子どもがままごと道具をどのように扱い、そしてそれぞれのままごと道具の扱い方に関する知識の体系化を、どのように図ってゆくかを、複数のままごと道具を組み合わせ扱うようになってゆく過程を詳細に分析することで明らかにしたいと考えている。また、子どもたちが、生活の中で実際に生活用品の扱い方を体験する機会は、すべての物において均一ではなく、物によって大きく異なっている。また、生活用品そのものの物理的構造における複雑さは、極めて多様である。このような接触機会の多少や構造的複雑さにおける多様さが、生活用品のレプリカであるままごと道具の扱い（ふり行為）にどのような影響を与えるかについても明らかにしたいと考えている。

本研究は、公立保育園 4 園の未満児クラスに在園する幼児とクラスに配属されている保育士の方々にご協力をいただくことによって可能になったものである。本研究は、子どもたちが保育園の生活に慣れ、それなりに落ち着きを見出すと思われる平成 16 年 6 月から開始している。開始当初の対象児は、すべて 4 園の未満児クラスに所属しており、これら 4 クラスの子どもの総数は 66 名である。各クラスから 4 名、計 16 名(男児 9 名、女児 7 名)を抽出児として選出する。途中で 1 名の抽出児が退園されたり、平成 17 年度に入り新しいクラス編成で抽出児が年齢の関係から異なる年齢クラスに所属するものが出るなど、研究開始時当初の保育状況と異なる事態がいろいろと発生する。そのような場合にも、園長先生はじめクラス担当の保育士の方々の配慮によって、基本的な観察環境の恒常化を図って

いただいたことに感謝を申し上げている。無事に 3 年間にわたる継続研究を続けられたのは、多くの配慮を保育園から頂いたことによるものである。

継続研究の 2 年目の終りに未満児クラスの子どもの姿を映像で見せてほしいとの要望が保育園からなされる。未満児クラスと 1 歳児クラスでは保育者が変わるため、未満児からの子どもたちの姿を通してみたいという要望である。生映像を見ていただくには、膨大な時間が掛るため、急遽、抽出児が集中して遊んでいる場面を編集したテープを作成する。保育士の方々からは、ままごと遊びという同じ課題場面における子どもの姿を 1 年間通して見ることは、今日の前にいる子どもの姿を時間の流れに載せて捉えることができ、多くの気づきと子ども理解が深まった等の感想をいただく。他の保育士の方々と改めて映像を見たいとのご希望があり、編集テープを差し上げることになる。本研究のデータが、このような形で具体的に保育現場に貢献できたことを、大変ありがたく思っている。

本研究を遂行するに当たって多くの方々のご支援とご協力をいただきましたことに対し衷心より感謝を申し上げます。

保育園の子どものままごと遊びを観察する機会を提供いただいた春日保育園園長の袖山好恵先生（平成 16 年度）飯野邦子先生（平成 17・18 年度）、中央保育園園長の別所早苗先生、北本町保育園園長の佐藤昭子先生（平成 16 年度）岡本フミ先生（平成 17・18 年度）、東本町保育園園長の岡本フミ先生（平成 16 年度）小林礼子先生（平成 17・18 年度）及び各保育園の保育士の方々、研究にご協力いただいた園児の皆さんに感謝を申し上げます。

また、ビデオ撮影・逐語記録の作成・データの分析など、本報告書作成のために直接的なご協力をいただいた上越教育大学の学部生である三木由香里さん、小川奈美さん、小川由希乃さん、藤原射祥子さん、研究全体をいろいろな面から支援いただいた足利短期大学講師の吉澤千夏さん、ビデオ撮影・逐語記録の作成に協力をいただいた半澤久枝さん、田村綾子さん、天野歩子さん、吉田その子さん、石野亨さんに感謝を申し上げます。特に、保育園との日程調整など具体的に撮影を続けるために、いろいろ心配りをしていただいた半澤久枝さん、天野歩子さん、吉田その子さんのお力添えがあったことで、無事に撮影を終了することができたことを記して謝意を表します。

ままごと遊びの分析に関しては、三木由香里さん、小川奈美さん、小川由希乃さん、藤原射祥子さんは、データを卒業研究に使用するため膨大な時間を費やしてくださいました。特に、データ分析の一致率を上げるための訓練と気の遠くなるような膨大な量の逐語記録のコーディングに関して、すべてダブルチェックを完遂された彼女たちに心底敬意を表します。本報告のデータの多くは、彼女たちの労作に依拠していることを記して謝意を表します。

平成 19 年 3 月

研究組織

研究代表者： 大瀧ミドリ（上越教育大学 学校教育学部）

交付決定額（配分額）

研究種目	基盤研究（c）
課題番号	16500471
研究者番号	40056388
研究経費	平成16年度 1,700(千円)
	平成17年度 1,000(千円)
	平成18年度 1,000(千円)

目 次

はしがき	i
I 生活文化を具現化したままごと遊び	1
II 研究目的	7
III 研究方法	9
1. 研究対象	9
2. 撮影時の状況	9
3. 映像の処理	10
4. 分析対象場面	11
5. 社会的用途・機能に関する分析の視点	12
6. 分析の信頼性	18
7. 観察回数と抽出児の年齢	18
8. 解析方法	18
IV 結果	19
1. ままごと道具の接触頻度	19
2. ままごと道具の扱われ方	23
3. ままごと道具の扱い方に関する履歴の分析	43
V まとめ	110
おわりに	115
文献	116
資料	118

I 生活文化を具現化したままごと遊び

1. 生活文化としての意味と意味体系の構築について

子どもは、文化的にニュートラルな社会に生まれてくるわけではなく、特定の文化のもとに生まれてくる。子どもは、繰り返しとルーティン化された日常生活における経験を通してその社会が有する文化を個人の中に定着させて行く(無藤 1986)。

子どもにとっても大人にとっても日常生活は、繰り返しの活動の集積として存在しており、子どもは、繰り返される活動体験を通して活動が生起する時系列的見通しと物の扱いなどの暮らし方に関する技術と、その意味を学習し体得することが期待されている。このような活動の生起に関する時系列的理解・知識を表す概念がスクリプトである。スクリプトとは、事象(event)と状態(state)との間の因果関係による連鎖をもった知識構造をあらわす概念であり、人工知能の分野で最初に使用された概念である (Schank & Abelson 1977、Schank & Riesbeck 1981)。つまり、スクリプトとは一連の時系列的・因果関係的行為に関する知識であり、心的表象である。表象であるスクリプトは、複数のスロットを時系列的・因果的に関係づけた行為の表出によりその実態を確認することが可能となる。Schank らのスクリプト理論に基づいて Bower、Black & Turner(1979)は、大学生を対象として大学生も同様の知識を用いていることを見出し、人間の認知にスクリプト理論を使用できることを示した。辞書的には、スクリプトは「劇の台本」という意味を有している。Schank ら(1977、1981)は、人間が日常繰り返す事象に関する知識は、あたかも劇の台本のような形式で記憶されていると考えている。例えば、レストラン・スクリプトを獲得しているということは、レストランに入店してから店を出るまでの手順を知っていることを意味する。このレストラン・スクリプトは、レストランが存在する社会でのみ有効なスクリプトである。つまり、子どもが獲得するスクリプトは、子どもが住む社会で共有されている文化そのものということができる。それゆえ、子どもがスクリプトを獲得したということは、その社会における行為の準拠枠を他の人と共有することを可能とすることを意味している。特に、スクリプトを構成するスロットは、具体的な行為にかかわる知識であるため、本研究で問題としている日常生活の中にある生活用品の取り扱い方を記述する用語としてとらえることができる。つまり、生活文化の視点から考えた場合、スロットを具体的な物の扱い方と捉え、スクリプトをそれらの物を時系列的に扱うことによって表出する生活行為に関する時系列的知識と捉えることができる。

外山・無藤は(1990)、母子の食事場面を文化に熟達した指導的他者(母親)と未熟な者(子ども)とのやり取りの過程とみなし、食事に付随する文化的意味の習得過程と捉えている。

実際の母子の食事場面を分析し、母親の発話内容は食べているときには、まず栄養摂取に関わる生理的機能に関する情報提供が重視される。その後「味（「おいしいね」など）」や「道具（お箸使ってみたら？ など）」など、文化的情報が子どもに提供されることを明らかにしている。また、子どもと母親の発話における意味的随伴性に関し、文化的に習熟した指導的他者（母親）による情報の提供の後に、それを模倣という形で直接学習する段階を経て、子どもは自立的に文化的意味の実践者として振舞うようになることを見出している。また、吉水(1989)は、1組の2歳女兒とその母親のままごと遊びを1年間に渡り継続観察を行い、スクリプト構造が2歳児の前期、中期、後期で異なる3相を示すことを見出している。つまり、2歳の前期は、スクリプトの基本構造獲得期であり、中期は前期に獲得された大枠のスクリプトに、子ども自身のイメージにより新しい、分化した事象を取り込むスクリプト構造の分化期であり、後期は事象を自在に操作可能なスクリプト構造の自由化期と命名している。そして、この結果からスクリプトの構造は、2歳代に大きな変化を生じる可能性を指摘している。このことは、スクリプトの中にままごと道具の使用が必然的に伴うわけであり、それらの道具の扱いも文化的適用がなされていることが推察される。吉澤ら(2001、2002、2003)も1歳から3歳の母子40組を対象に、ままごと遊び場面におけるスクリプトの獲得過程を縦断的に明らかにしている。彼らによると、スクリプトを構成している子どものスロットの多くは、1歳時から2歳時にかけて出現率が増加することを明らかにし、この時期にスロット表出の転換期があることを指摘している。また、子どものスロットにおいては、日常生活における主要なスロットから文化的・社会的スロットへとという順序性のあることを見出している。母親は、子どもの年齢的発達に合わせて、スロットの表出を増減させるなどの変化を持たせることを示唆している。さらに、このような母親のスロットの表出は、子どもがスロットを獲得し、スクリプトを構造化させていくために、重要な役割をはたすことも示唆している。

このように日常生活場面やままごと遊び場面を使って、日常生活における時系列的手順に関する知識を子どもが獲得してゆく過程を明らかにする研究がなされている。しかし、これらの研究では、スクリプトを構成する各スロットの段階で使用される個々の生活道具が担っている生活文化としての社会的用途・機能についてどのように学び、日常生活の中に存在する多くの生活道具を目的的・有機的に連鎖を作っていくことをどのように学びながら各生活場面におけるスクリプトを獲得してゆくかについては明らかにされていない。しかし、このスクリプトの概念は、個々の生活道具の操作に関する手順の学習過程を研究するための概念としても有効であることが示唆される。

また、生活文化を子どもが、自分の中に取り込む過程に関する研究は、ほとんどが母子を対象に行われている。母子関係においては文化に習熟した指導的他者として母親が、子どもの意図をくむ関係の中で、生活文化を伝えることを目的とした多くの相互交渉を子どもとの間に行っている。保育所を利用する子どもの生活を見た場合、家庭で保育されている子どもとは異なり、年齢の近い子どもたちと生活空間を共有する生活を体験している。

このような生活場面では、物の操作に関する生活文化の情報を子ども同士の間でどのように共有してゆくのであろうか。Brenner & Mueller (1982)は、6名の男児からなる2つの遊びグループを対象に2名1組での遊び場面で表出された相互交渉の中で行われている意味の共有について検討している。意味の共有は、4ターン以上の長い相互交渉の方で多く見出されること、相互交渉の長さと言語の共有が有意な関連があることを見出している。また、意味の共有と相互交渉の長さの間には、まず、相互交渉の長さの方が先に表出され(15ヶ月)、その後に(18ヶ月)意味の共有の頻度が増すことを見出している。この結果は、意味の共有が相互交渉の長さに影響するものではないことを示している。しかし、吉澤らは、母子間の相互交渉において母親が、子どもとの意味の共有を図ることにより、スクリプトを構成するスロットの数が多く表出されることを見出している。また、スロットの数についてみると、1歳から2歳にかけての発達的变化の方が、2歳から3歳にかけての発達的变化よりも大きいことを見出している。このことは、スロットの表出は1歳後半から2歳にかけて顕著な発達の特徴を有していることを示唆しており、Brennerらと同じような結果を示唆している。子ども同士の意味の共有と相互作用の関係及び子どもと大人の意味の共有の関係では両者の関係が類似している可能性が示唆される。

2. ままごと遊び

ままごと遊びの命名に関しては『嬉遊笑覧(喜多村信節 1830年)』に「ままごととは小児の言葉に飯をままといふ。此戯は飯作り種々食物を料理する学びなればなり。女子のみにあらず」と記載されている(相賀 1971)。また、大藤(1985)によれば、「まま」とは食物のことであり、「ごと」とはハレの日の行事を意味し、「ままごと」とはもとはハレの日の食事のまねごとを意味するという。半澤(1980)によると、喜多村のいう、「学びなれば」とあるのは、「まねぶ」で真似事のことであり、俗に言う「ごっこ遊び」である、としている。さらに、「無正事」は、「見戯まさなごとは、小児の戯にて、雅正ならざる俗戯なり。今世に云ふ小児のまます事といへる是なり」と記載されている。このことからままごと遊びの「まま」は「飯」であり、炊事の真似事であり、それは無正事(正しくないこと)であり、「飯事」と表記される模倣遊事の一つといえる。ままごと遊びは、東北地方では「ふるまいっこ」長野県地方では「よばれっこ」と別称で呼ばれており、単なる炊事ごっこではなく、生活を縮図化した模倣遊事として行われている。ままごと遊びの道具が市販される以前は、自然物が利用されていた。このような自然物の利用はままごと遊びに特有なことではなく、日常の炊事でも自然物が器などに使用されていた。たとえば、一茶の句に「露の葉に いわしを配る 田植哉」とあるように、自然物が日常の生活の中で使われており、それらが子どもの世界で模倣されることは当然なことといえる、と指摘している。

このようにままごと遊びは、子ども自身を含めた子どもを取り巻く人々の生活を、映し出した遊びとして遊ばれてきている。つまり、子どもの内に飲食に関する時系列的な表象

として体得されているスクリプトが、道具を使った遊びとして遊びの場に出されたものがままごと遊びであるといえる。そのため、ままごと遊び場面で子どもがままごと道具を扱う、その扱い方にその道具にその社会が託している生活文化とその意味を表出していることになる。

ままごと遊びは、「ないものをあるかのように振舞う」ことで成立する遊びである。つまり、遊びに参加しているものが、「うそっこ」のことと承知しつつ楽しむ遊びである。このような了解の基に成立する遊びはふり遊びとも言われる。高橋(1992)によれば、ふり遊びとは、物 A が物 B であるかのように扱われ、子ども自身とは異なる人物の役割行為を子ども自身があたかもその人物であるかのように演じ、かつ子どもの生活する場である「今ここ」がまったく別の状況であるとみなされることによって成立する遊びである。ふり遊びには子どもの現実生活において習得された、あるいは「今まさに」習得されようとしている知識が持ち込まれる。物 A が物 B で「あるかのように」扱い、子ども自身とは別の人物に変身し、現実を想像上の状況と定義するこれらすべての作業は、思考による操作であり、この操作は「変換」と呼ばれている。ふり遊びの本質であるこの「変換」を可能にするものは、現実世界における事物、動物、人物、出来事に関する子どもの知識であると指摘している。

3. 子どもの物の操作の発達について

高橋(1984)は、子どもの物の操作に関する発達について Rosenblatt(1977)、高橋(1983)、Lowe(1975)の研究を概観して次のような指摘をしている。

9ヶ月時では子どもは、物を口に入れた後、それを床にたたきつけるなど、物の特性に合わせた扱いよりも、すでに獲得している動作パターンを物に適用することが多い。12ヶ月時になると、日常生活の中で使い慣れたもの(レプリカ)であれば、日常的な適切なやり方で扱うことができるようになる(たとえば、スプーンを1-2回口に運び、カップから飲む)。15ヶ月時には、終始一貫して、適切な使用法に従うようになる。21ヶ月時になると1つのものを他のものと「一緒に」使用するようになる。つまり、カップを受け皿の上に載せた後で、スプーンを探し、スプーンで「想像上の飲み物」をかき回し、飲むふりをする。このように目の前にないものがあたかも存在するかのように扱い始める。また、物を他のものの代わりに用いることもできるようになる(お皿の上に積み木の「ケーキ」を載せて、食べるふりをする)。24ヶ月時には、物を用いて、自分自身に対してばかりでなく、人形に対して、何かをするようになる(たとえば、人形にミニ果実を食べさせたりする)。30-36ヶ月時には物に対して人形を動作させるようになる(たとえば、人形の手にはカップを持たせて、別の人形に飲ませ、お皿を洗い、拭き、片付けるように人形を動かす)。Largo & Howard(1979)は、9ヶ月児、12ヶ月児、15ヶ月児、18ヶ月児、21ヶ月児、24ヶ月児、27ヶ月児、30ヶ月児を対象に遊び行動の発達を見ている。その結果、9ヶ月から15ヶ月の間に2つの物を組み合わせる遊び(椅子とカップなど機能的関連性のない組み合わせ)と、入れるものと入れられるものというような相補的關係遊び(人

形をカップの中に入れてたり出したりすることを繰り返す)ができるようになる。18ヶ月から21ヶ月の間に物を積み上げる遊びや仲間集め遊び(椅子をすべて集めるなど)が多くなる。18ヶ月にはテーブルの周りに椅子を配置するなど物をセットした扱いを始めるようになり、24ヶ月までには物をアレンジすること(テーブルの上に皿やカップやスプーンをセットする)ができるようになることなどを見出している。Fenson & Ramsay (1980)は、13ヶ月、19ヶ月、24ヶ月児を対象にして行為の連鎖の発達を見ている。その結果、19ヶ月児の多くは単純な繰り返しによる行為の連鎖を表出し、2つの行為が統合された連鎖は24ヶ月を過ぎないと表出しないことを明らかにしている。また、Fenson & Ramsay (1981)は、12ヶ月、15ヶ月、19ヶ月児を対象として2つの行為からなる連鎖のある遊びについて自主的表出と模倣による表出を見ている。その結果、12ヶ月児は模倣もできない。19ヶ月児は模倣として行うことができるけれども、自主的に表出するものはわずかである。このことから15ヶ月と19ヶ月の間に2つの行為を連鎖させて行うことができることを示唆している。中野(1984)は、多くの研究で用いられている接近法が、カテゴリーカルな分類であるため、Bruner(1973)が示唆した行為の序列構造や、行為を組み立てていくための手続き的知識(procedural knowledge; Greeno 1980)の記述は十分になされていないとして、一事例の縦断的追究によって、予備的な方法論的検討を行っている。それによると、11ヶ月時は act と object の結合が確定せず、act、object とともに、そのスキーマをいろいろな対象に当てはめる段階にあり、この時期の特徴的な行為の系列は、2つの対象間の役割交代によって2つの対象のセット化の枠組みを作っており、行為は対象相互の関係付けに向けられ、その中で新しい組み合わせに必要な手続き、行為の調整を学んでいることを示唆している。また、20ヶ月時では、行為の構造は、順序立てられ、確定化されると同時に、act-object スキーマは定型格的になり、act は対象の機能に特殊なものとなる。その結果、ある対象物は、一定の行為のスキーマを自動的に喚起させるようになり、そのようなスキーマの自動化によって、象徴行為、sub-routine を含む体系及び、それに必要な予見が可能になっていく。反面、生じた行為のスキーマへの固執という行為の硬さも、また同時に現れると指摘している。つまり、11ヶ月時は探索的であり、20ヶ月時は手続き的である特徴を有しており、この間の飛躍的な発達がどのように生じたのかわからないと指摘している。さらに、Belsky & Most(1981)が、transitional play として示した、13-18ヶ月の間で著しい行為形態、及び Fenson & Ramsay(1980)が示唆した、act-object 結合に必要なコンピテンスとそれらを順序付けるコンピテンスの違い、さらに反復のように、それぞれの月齢で異なる文脈で再現されるものなどを検討していくことが、今後の課題であると指摘している。中野が指摘しているスキーマは、先に述べたスクリプトとほぼ同じ概念の用語である。これらの先行研究では子どもの遊び行動を見る道具としてままと道具が使用されている。しかし、多くの先行研究ではままと道具の扱いを生活文化の具現化された行為としてではなく、認知的発達の観点から研究が進められている。また、中野(1984)が指摘したように、一般化・抽象化を図るため分類的分析手法がとられているため、知識の構造がどのように図られて行くのかに

ついて十分な結果が得られているとは言えない。

本研究では子どもが、自分の身近にある物の操作を通してそのものに託されている文化的意味である扱い方と複数の物を有機的に、目的的に生活用具を関連付けて使ってゆく学習(スクリプトの獲得)過程を明らかにしたいと考えている。特に、ままごと道具として子どもたちに用意されている道具は、子どもたちの具体的な生活を見た時それらの物がすべて子どもたちに等しい位置関係を持っているわけではない。それゆえ、ままごと道具として子どもに提供されている個々の道具に関する社会的用途・機能の理解に、子どもの日常生活における物と子どもの距離関係がどのような関係にあるのかについて明らかにすることは、生活文化という視点から子どものままごと遊びをとらえるとき重要な視点となってくる。

II 研究目的

子どもにとって遊びは生活そのものであり、遊ぶことにより様々なことを学ぶと指摘されながらも、遊びを介して生活文化の有する意味体系を子どもの内に構築して行く過程に関して十分な知見が得られていない。そこで、生活を象徴するままごと遊びの中に、子どもが表出する意味知識を手がかりに、子どもが自分の外に存在する生活文化、つまり、大人社会で共有されている道具の扱い（それぞれの道具に固有の社会的意味）として表出されている生活文化を、子どもが自分の中に取り込み、その取り込んだものを相互に関係づけ、生活文化として再び道具の扱いを通して表出する過程を分析することにより、子どもが生活道具に託されている生活文化の意味を体系化（構築）してゆく過程を明らかにする。

子どもは、ままごと遊び場面で多くの場合、ミニチュアの生活道具を遊具として使用する。そのため、子どもが扱うままごと道具の扱い方と、ミニチュアの元になっている生活道具が大人社会における一般的な扱われ方とを、比較することでそれらの道具に託されている生活文化としての用途・機能を子ども自身がどのように理解し、表出しているかを見ることができる。また、複数のままごと道具を関連づけて扱う扱い方を見ることで、生活という営みにおいて目的的に道具を扱うための行為の連鎖としての関係づけを明らかにすることができる。つまり、生活行為という視点から見た時、生活道具は具体的な生活目標を達成するために、効率よくそれらが関連づけられて使用されることが重要となる。そして、生活目的を達成するために複数の生活道具を関連づけるためには、単独の生活道具に関する文化的な意味の体系化が生活行為という視点から図られる必要がある。複数のままごと道具を組み合わせた扱い方を見ることで、個々の道具に託されている生活文化としての意味を子どもが自己の中で体系化を図ってゆく過程を見るのが可能になる。

また、子どもが、ままごと道具として子どもたちに提供されている個々の道具の原型の生活用具の扱い方について、日常生活の中で直接・間接に体験できる機会は均一ではない。つまり、子どもにとってままごと道具の日常性は、物によって異なっていることが考えられる。カップなどの食器やスプーンなどの食具のような道具は、発達初期の子どもの日常生活において、その生活体験を数え切れないほどに馴染みのある道具である。しかし、鍋などの調理器具やお玉などの調理用具は、子どもたちにとっては必ずしも馴染みの道具と言えない。このような馴染みの違いにより生活文化の意味体系を構築する過程がどのように異なるかについて検討する。特に、3歳以下の子どものままごと遊びは、子ども自身が日常生活で体得した生活文化としての扱い方を模倣的に再現することが指摘されている。1歳から3歳までの子どものままごと遊びを3年間にわたり縦断的に継続研究を行うことで、内省的言語表現が不可能な年齢の子どもたちの生活文化に関する意味体系の構築過程を明らか

にすることが可能となる。

さらに、それぞれの物に関する意味を理解し、それを生活行為として表出するためには、それらの意味の体系化が図られる必要がある。この体系化の過程として次の6つの段階を仮説として提示し、この仮説について検証を試みる。なお、ここでいう文化化とは、生活文化の意味の体系化を構築する過程を指す用語として使用している。

- ① 文化化の前段階：子どもは、物を単に物理的存在として扱い、その行為の表出が、個々別々に、断片的になされることがこの段階の特徴である。
- ② 第一次の文化化の段階：子どもは単一の物を社会的用途・機能に見合った扱い方をする（カップに口をつけて飲む。スプーンを口に入れる。）。このような使用が可能になるということは、目の前の対象物のみを扱っているのではなく、動作を遂行するために目前に存在しない物を空想し、想定することが可能となっていることを意味している。
- ③ 2つの物の有機的関連における文化化の段階：子どもは単一の物を扱っていた状態から、物同士を、社会的用途・機能に見合った扱い方で、かつそれらを有機的に関連付けて用いるようになる。2つの物の有機的関連とは多くの場合、「カップとスプーンを組み合わせた使用」に見られるように物の同時的使用が可能になることであり、時系列的理解を必要条件としない。
- ④ 3つ以上の物の有機的関連における文化化の段階：3つ以上の道具を有機的に関係づけて使用するとは、単にそれぞれの物の扱いとしての社会的用途・機能を理解しているだけでなく、それらの物と物とのか使い方について、時系列的関係を理解していることがこの段階の特徴であり、生活行為に関するスクリプトの獲得を意味している。
- ⑤ 物の象徴化における文化化の段階：動作または動作系列の中で使用できるように、物を変換させる、つまり、見立て（積み木をケーキの代わりに用いる）や代用的使用ができるようになることがこの段階の特徴である。物の扱い方に関する行為は、ストーリー性のある全体として統合された系列に組み込まれ表出されるようになる。
- ⑥ 文化化に対してディレクター的役割を演じる段階：他者に対して役割や行為の遂行を、ディレクター的位置から指示することができるようになる。

Ⅲ 研究 方 法

1. 研究対象

研究対象は、新潟県 J 市の公立保育園 4 園の未満児クラスに在籍する幼児とクラスに配属されている保育士である。観察開始時未満児クラスの在園児数は、A 園 13 名、B 園 24 名、C 園 15 名、D 園 14 名、総計 66 名、担当保育士の総数は 20 名である。各園から観察開始時の年齢が小さい子どもから 4 名を抽出する。抽出児の平成 16 年 4 月 1 日現在の年齢は、最小値 10 ヶ月 4 日、最大値 1 歳 8 ヶ月 22 日であり、平均年齢は 1 歳 3 ヶ月 10 日である。抽出児は、男児 9 名、女児 7 名である。なお、抽出児である女児 1 名が、平成 17 年 3 月に退園したため、平成 17 年 4 月に新たに女児 1 名(平成 17 年 4 月現在の年齢 2 歳 1 ヶ月 19 日)を抽出児として加える。

各園の抽出児 4 名のうち毎月 2 名を撮影対象とする。撮影に当たっては、各抽出児を隔月に撮影対象とすることを基本とする。撮影は、平成 16 年 6 月から平成 18 年 12 月まで各園で毎月 1 回行う。ただし、1 園のみ 12 月に予定していた抽出児が欠席したため平成 19 年 1 月に最終撮影を行う。

なお、2 歳時には抽出児 16 名のうち 4 名(2 園)は、年齢の関係で引き続き未満児クラスにとどまり、12 名は 1 歳児クラスに在籍する。そのため、観察クラスの総数は 6 クラス(4 園)となる。観察クラスの子どもの総計は 118 名(未満児クラス 30 名、1 歳児クラス 88 名)であり、担当保育士の総数は 22 名である。また、3 歳時には抽出児 16 名のうち 1 名は 1 歳児クラスにとどまり、14 名は 2 歳児クラス、1 名は 3 歳児クラスに在籍する。なお、3 歳児クラスに在籍することになった抽出児は、撮影時に 2 歳児クラスに遊びに来るように対応してもらうことになる。C 園では 4 名の抽出児が、2 名ずつ 2 つの 2 歳児クラスに分かれたため観察クラスの総数は、6 クラス(4 園)となる。観察クラスの子どもの総数は 118 名(1 歳児クラス 15 名、2 歳児クラス 103 名)であり、担当保育士の総数は 8 名である。

抽出児 16 名および観察クラスの子どもたちと保育者のビデオ撮影に関しては、当該市役所の担当課長及び保育園園長に研究の目的などについて説明し研究協力の許可を得る。さらに、保護者の許可を取るよう指導があった保育園については、事前に保護者に研究の趣旨を伝え、許可を得る。

2. 撮影時の状況

撮影は、通常の保育が行われている保育室で行う。子どもたちが、午前中のおやつを食べている間に保育室の畳が敷かれている領域にままごと道具を配置する。ままごと道具は、子どもおむね 5・6 名に 1 セットの割合で配置する。この数は、ままごと道具の取り合いによる喧嘩が起きにくい数として、子どもの遊び状況を勘案して設定したものである。

おやつ時間帯は、いずれの保育園も公立であったため、ほとんど同じ9時半頃から10時頃に設定されている。子どもたちは、おやつ終了後トイレを済ませてから、保育士に伴われて保育室の畳の領域に移動し、自由にままごと道具で遊ぶ。観察時間として約1時間の時間が設定され、その時間は大体午前10時半頃から11時半頃である。ままごと遊びの時間帯には、保育室内の大型遊具以外の遊具は、すべて所定の棚などに収納されている。ままごと遊び終了時間の指示は、子どもの遊びの状況（飽きなど）と保育園の保育内容との関係を勘案して子どもたちにクラス担当の保育士が伝える。

使用したままごと道具セットは、河合製の木製で着色してないものである。その構成は、皿2種類（スープ皿5枚、取り皿5枚）、茶碗(5個)、カップ(5個)、湯のみ(5個)、スプーン(5本)、フォーク(5本)、蓋つきのポット(1個)、おたま(1個)、しゃもじ(1個)、包丁(1本)、まな板(1枚)、蓋つき両手鍋(1個)、蓋つき片手鍋(1個)、フライパン(1個)、電子レンジ(1台)、ガスコンロ(1台)、テーブル(1個)、食器棚(1個)、の18種類である。皿や茶碗などの食器類と電子レンジは、食器棚に収納させた状態でテーブルの左側に配置する。フォーク入りのフライパンが載っているガスコンロ、包丁が置かれたまな板、お玉が入った状態の片手鍋、フォークが載った皿2枚をテーブルの上に配置する。食器棚の手前の床には、ポットと皿にカップとスプーンをセットしたもの2組と湯呑み2個を配置する。テーブルの右前の床には、しゃもじが入った両手鍋と茶碗2個を配置する。これらの配置は、子どもたちがままごと道具にかかわりやすい状況として設定したものである。ままごと道具の配置は、3年間いずれの園においても毎回同じ配置とする。撮影は、抽出児1名に1名の撮影者がついておこなう。そのため毎回2名の撮影者が、撮影にあたる。撮影者は、クラスの子どもたちの遊びを妨害しないような位置に立つことを心掛けて、その都度立ち位置を変えながら、できるだけ抽出児の顔を正面から撮影できるように心がける。また、撮影当日のおやつ時間帯に、撮影クラスのすべての子どもの顔写真を、一人ずつ名前を呼びながら撮影する。これは、抽出児がかかわった子どもを特定するための資料として利用することを目的としたものである。

3. 映像の処理

デジタルビデオテープに収録した映像をコンピューター画像に取り込み、1分単位の動画ファイルを作成する。動画ファイルを用いて逐語記録を作成する。逐語記録を作成するに当たっては次の点について配慮する。

- 1.抽出児の活動に注目する。
- 2.抽出児が自主的に行う行動に注目する(自分自身の行動、保育士や他児への働きかけ)。
- 3.保育士や他児への注目・模倣行動に注目する。
- 4.保育士及び他児が抽出児に働きかけた行動に注目する。
- 5.細かい動きではなく、遊びの流れに注目する。
- 6.「ままごと遊び」を見る場合は、「遊び」とする。

他児の様子を見ている場合は、必ずその他児の様子を具体的に記録する。

- 7.時間の区切りは、抽出児の遊び(行動)の目的に注目して行う。

8. 抽出児と関わる保育士及び他児については（ ）に洋服などの特徴を記載する。
9. ファイル名：子どもの名前の後に観察年度を記載する。例：〇〇 △△(2004)
10. シート名：観察年月日とする。
11. ページ番号を付ける。

上記以外の記録作成上の注意事項

1. 抽出児の関心の記録：手でものを操作(手に持っている)しながら関心が他児や保育士に向いている場合は、物の操作だけでなく何を見ているかも記録する(例：湯飲みを手にしながら C1 と T1 が乾杯をしているのを見ている)
2. 抽出児の活動の記録：(1)新しい活動・行動を発現した場合、その活動・行動を引き起こすきっかけになった行動がある場合はわかるように記録する(例：他児が乾杯をしているのを見て抽出児も仲間に入る)(2)物を手にしてから離すまでを記録する(例：「湯呑みを持つ」という記録があるのにそれを「手放した」記録がない場合があるので、必ず手放した時点も記録する)。
3. 働きかけと応答に関する記録：(1)抽出児が他者(保育士や他児)に働きかけた場合、働きかけだけでなく、その働きかけに対して他者がどのような応答をしたかを記録する(例：他者が働きかけに応答しなかった場合は、「・・・のため気づかない」「無視」などと記録する)(2)他者が抽出児に働きかけた場合も同様に抽出児の応答について記録する。
4. 行為の流れがわかるような記録：例 1：「〇〇はスプーンでカップをかき混ぜた。〇〇はスプーンをカップの中に入れた。」の記録でスプーンとカップが同じ場合は、このように 2 文に分けて記述せず、「〇〇はスプーンでカップをかき混ぜ、スプーンをカップの中に入れておいたままにした。」のように 1 文に書くと流れが見える文になる。
例 2：「〇〇はお皿にのったカップを食器棚から取り出し床に置く。〇〇はお皿とカップを別にして床に置く。」は「〇〇はお皿にのったカップを食器棚から取り出し、お皿とカップを別にして床に置く。」と 1 文にする。もしくは「〇〇はお皿にのったカップを食器棚から取り出し床に置く。〇〇はそのお皿とカップを別にして床に置く。」と指示代名詞(その)を挿入することで 2 文に分けても、2 文の関連がよくわかる。
5. 動詞の表記の工夫：(1)文脈を踏まえた表現(例 1：「スプーンでカップをかき混ぜ、スプーンをお皿に当てる。」この例の場合、行為の状況はスプーンでお皿をトントンしているので「当てる」という表現でも間違いではない。しかし一連の動きとしてみた場合「カップの中のものをお皿に盛り付ける」と文脈的に解釈した方が行為者の行為の意図が反映された表記になっていると考えられる。例 2：「カップを口に当てる」この場合も文脈的には「カップから飲む」と、子どもの行為を解釈することが適切であると考えられる。) 行為の意味・意図を文脈から考えた記述にする。(2)状況が見える表現(例：「カップをお皿に当てる」どのようにカップをお皿に当てているのかわかるような表現にする。この例の場合は「カップをお皿の上でカチカチ打ち合わせる」の記録のほうが行為をよく表現している(状況がよく見える)。(3)行為者を主語にする(例：〇〇は、△△に□□をしてもらう。→ △△は、〇〇に□□をする)。
6. 時間の記録：(1)1 分ごとに区切る。(2)新しい行動が起きた時点を記録対象にする(初発秒のみの記録でよい)
7. その他：(1)記録のチェック(確認)にコマ送りを活用すると便利である(ただし、音声確認は無理)(2)1 分後とに区切り線を入れる場合はラインの上下にあき行を挿入する(空行がないと印刷したときにラインと文字が重なり、読みにくくなる)。

4. 分析対象場面

抽出児が、ままごと道具に触れた時点を分析開始点とし、ままごと遊びから完全に離れ

た時点を分析終了点とする。観察日によってはその日の保育計画の関係から子どもの遊びの状態とは別に定められた時間により遊びが終了される場合もある。その場合は、終了が告げられた時間を分析終了時点とする。実際そのままごと遊び場面では子どもたちの遊びが最高に盛り上がった状態で終了が告げられることはない。分析は、逐語記録と映像を反復視聴することで行う。

5. 社会的用途・機能に関する分析の視点

本研究では子どもが、生活文化を取り入れてゆく過程をそのままごと道具の扱い方を通して捉えようとしている。そこで、抽出児のままと道具の扱い方が、日常生活における一般的な大人の扱い方と類似した扱い方をした場合には、その道具に付与されている生活文化、つまりその道具の扱い方として期待されている社会的用途・機能を理解してその道具を扱っているとみなすこととする。ここでは、ままと道具の接触頻度と扱い方について分析の視点を述べる。

(1) ままと道具の接触頻度の分析方法

観察時に抽出児が、ままと道具に触れた頻度をままと道具の種類別にカウントする。「触れた」とは、抽出児がままと道具を手にしてからその道具を手から放すまでの間をカウントの単位とする。複数の物に同時に触れている場合は、それぞれの道具別にカウントする(道具に触れてから放すまでを逐語記録で追いかけるようにマークし、最初に触れた時点を拾い出すとカウントしやすい)。

(1) カウントの原則

スプーンやフォークなどを1本、1本、別々にレンジに入れている場合は、スプーンやフォークなどを扱った本数を「扱った頻度」としてカウントする。逐語記録に数が記載されている場合は、その数だけそのものを扱ったとみなし、カウントする。スプーンやフォークなどをわしづかみにして数が特定できないときは、「複数のもの同時扱い」にカウントする。また、テーブルをひっくり返して上に載っていたものを下に落とした場合は、テーブルを1とカウントし、「上に載っていたもの」は「複数のもの同時扱い」とカウントする。

(2) カウント対象

スープ皿と取り皿は、上面の直径が同じサイズで、スープ皿の深さが取り皿よりも少し深いという形状の違いがある。しかし、子どもにとってはその違いを識別することが難しいこと、ビデオ映像では両者の識別がほとんど不可能であるため、スープ皿と取り皿を皿として扱う。また、ポット本体とポットの蓋は、それぞれを単体の物として扱われることがあるため、それぞれをカウント対象とする。さらに、両手鍋と片手鍋にはそれぞれ蓋が付いている。これらの蓋も鍋本体とは別に扱われている。2種類の蓋は、ほぼ同じ大きさでどちらの鍋にも使用可能であり、ビデオ映像でそれらを識別することは不可能であるため、2つの鍋の蓋は鍋の蓋として同じ扱いとする。このことによりままと道具については、「茶碗・カップ・湯呑み・スプーン・フォーク・お玉・しゃもじ・皿・ポット・ポットの蓋・両手鍋・鍋の蓋・片手鍋・フライパン・コンロ・レンジ・まな板・包丁・テーブル・食器棚・複数の

もの同時扱い」の 21 種類の物をカウント対象とする。また、観察時間帯には保育園の玩具類は片付けられているのが常である。しかし、時には持ち出してきてままごと道具と一緒に組み合わせて遊ぶなどの状況があったため、園の玩具などを扱った場合は、それらを「その他」として一括して扱うことにする。そのため、子どもが扱う玩具の頻度をカウントする項目の総数は、22 項目となる。

(2) ままごと道具の扱いとその頻度

この分析では、抽出児が「ままごと道具」を手にした後に、その「ままごと道具」をどのように扱うかに注目する。つまり、その扱いが、「(大人社会の) 社会的用途・機能に即した扱い」であるか、「(大人社会の) 社会的用途・機能と異なる扱い」であるかを判別することが、この分析の主たる目的である。さらに、抽出児が扱った道具の数に注目し、「単独」「2 つ」「3 つ以上」であるかについて分析する。なお、「2 つ」及び「3 つ以上」の扱いとは、同時に使用する場合と、ある目的を持った一連の行為の中で 2 種類ないし 3 種類以上のままごと道具を扱う場合を言う。以下にチェックの原則を記載する。

①連続して同じ扱いが繰り返し表出された場合は、最初の表出時のみをチェックする。(ただし、子ども自身が、他の活動に興味に移り違う活動をした後に再度繰り返した場合は、チェック対象とする。他児の働きかけなどにより一時的に中断した後に再開された場合は、その再開はチェック対象としない。なお、抽出児が他児の働きかけに乗って積極的に遊びこんだ後に再開した場合は、その再開はチェック対象とする。)

②物を手に取った場合、最終的に何に使用するために手にしたのかを確認しチェックする(湯呑みを拾いテーブルの上に置く場合は、「拾う」目的は「テーブルの上に置く」ためであるので、「拾う」はチェック対象とせず、「テーブルの上に置く」をチェック対象となる)。

③子どもが遊びモードに入っている場合および子どもの活動に遊び的要素がある場合は「ふり(脱文脈化: decontextualize)」とみなす。「たまたま目の前にあったから手にした」という場合は、「ふりといえない扱い(文脈的扱い)」とみなす。「その他」とは、「ふり」か「ふりでないか」判断がつきにくいものの扱いを言う。

④同一の物であってもその物に対する複数の働きかけ(操作目的)がまったく異なるときは働きかけを別のものとしてチェックする(「スプーンを食器棚に入れた後、食器棚を押し歩く。」この場合は食器棚に対する「スプーンを入れる」と「押し歩く」は別の操作目的に基づいた働きかけであるとみなす。それゆえ、前者は「社会的用途・機能を活かした(即した)使用」とみなし後者は「社会的用途・機能と異なる使用」とみなす)。

⑤チェック対象にしないものの扱い(レンジの中からスプーンを取り出しスプーンをテーブルにおく場合、レンジをチェック対象の「物」とみなさない。ただし、レンジの中にスプーン等、本来レンジの中に入れていないものであってもレンジを「入れ物」として扱っている場合は「社会的用途・機能と異なる使用」とみなす)

⑥3種類以上のものの組み合わせにおけるチェック(「茶碗をスプーンでかき混ぜ、茶碗をテーブルの上に置く」場合「茶碗とスプーン」「茶碗とテーブル」の2つのものの組み合わせ別にチェックすると「茶碗」がダブルチェックされるため、テーブルの上に置く「茶碗」はチェック対象としない。また、「ポットにフォークを入れ、テーブルに置く」場合、「ポットにフォークを入れ」は「異なるふり」である。一方、「ポットをテーブルに置く」は社会的用途・機能に基づくふりである。このように一連の行為が異なる2種類の「ふり」とみなされる場合は、「3つ以上」ではなく「2つのもの」の組み合わせとしてふりをチェックする。)

ままごと道具の扱い方を見るためのカテゴリとして、以下の(1)から(9)の9項目のカテゴリを設定する。

(1)社会的用途・機能による単独のふり

調理器具類：片手鍋を振る(料理をしているように)。

食器・食具類：スプーンで食べる。食器などを起こす(こぼれるなどのふりが認められる場合、認められない場合は(7)にチェックする)物が入っている前提で他者に食器類を差し出す(聞かれたら答えるのでよい)

その他：テーブルを自分の方に引き寄せる。

(2)社会的用途・機能と異なる単独のふり

調理器具類：ポットの注ぎ口から飲む。ポットから相手の頭に注ぐ真似。鍋の蓋を口に入れる。お玉を口に入れる。鍋類から直食べした場合(口をつけて食べる)

食器・食具類：茶碗を口に入れる(食べる・飲むとは異なる)。

その他：テーブルを押し歩く。食器棚を押し歩く。持ち歩く。テーブルに腰掛ける。食器棚に足を入れる。テーブルを傾ける。「物を投げる」は遊びと見なし(2)とする。

(3)2つのものを組み合わせた社会的用途・機能によるふり

調理器具類：ポットから茶碗に注いで飲む(この場合は注ぐ操作のポット(3)茶碗(3)そして飲む操作の湯呑み(1)と分けてチェックする)。鍋からカップに注ぐ。レンジのドアを単に開け閉めしている場合は(7)、しかし、茶碗をレンジに入れドアを閉めるなど、ドアの開け閉めの間に「茶碗を入れる」などのふりが認められる場合は社会的操作であるためレンジ(3)茶碗(3)となる。(ただし、レンジに茶碗を入れるという記述だけでは、レンジをレンジとして使用しているのか、単なる入れ物として扱っているのか不明の場合が多い。映像などで確認する必要がある。入れ物として扱っていれば(4)とする)鍋の蓋をフライパンにする。「レンジを食器棚に入れる」ことは最初の玩具の配置であるため、「社会的用途・機能」による使用とする(ただし、他の食器などと一緒に投げ込んでいる場合は(4)とみなす)。レンジにスプーンなどの食具を入れてレンジの扉を開け・閉めしている場合は、レンジを入れ物として使用しているので扉の操作はチェック対象としない。

食器・食具類：フォークで皿をかき混ぜて食べる(皿から食する場合は、スパゲティーなど、このようなフォークの使用を社会的機能によるふりと見なすことが可能である。また、ヌードル(特に、カップ麺など)は、フォークでかき混ぜながら食べることがある。この場合スプーンだとうまく食べられない。このような社会的状況を勘案すると、むしろフォークとスプーンの用途を詳細に分けない方がよいように思われる。この場合はかき混ぜるための操作の湯呑み(3)フォーク(3)そして食べるための操作の湯呑み(3)フォーク(3)と分けてチェックする)。湯呑みを皿の上に置く(皿が茶托のように見えることによる。湯呑み(3)皿(3)とチェックする)。皿をテーブルの上に積み重ねておく。湯呑みをフォークでかき混ぜるおよび食べる(フォークとスプーンの用途の違いは明確に分けない)フォークで茶碗から食べる。「湯呑みから湯呑みに注ぎ飲む」場合、(この場合は注ぐ操作の湯のみ(3)湯呑み(3)そして飲む操作の湯呑み(1)と分けてチェックする)「他児(T)にスプーンを差し出す」の例では、抽出児はこの前の行為として「皿をかき混ぜる」を行っている。このように、食べ物が入っているなどのふりを伴って相手に物を差し出したときは(3)とチェックする。単なる物を差し出す行為は、物の操作とは見なさない。「スプーンを食器棚に入れ、他のスプーンをまた食器棚に入れる」

場合は物を食器棚に入れた回数だけ(3)・(3)とチェックする(投げ入れることを楽しんでいれば(4)チェックする)。

その他：食器棚にものを片付ける(物が1つ1つ明記されている場合は、すべてのものが(3)とチェックされる。また、物の数だけ食器棚が(3)とチェックされることになる。)ただし、保育士に指示された場合はチェック対象にしない。テーブルとテーブルを並べる。「食器棚をひっくり返した上にレンジを置く」、または、「テーブルの上にレンジを置く」は食器棚(3)レンジ置く(3)、テーブル(3)レンジ置く(3)とチェック。食器棚を倒してテーブル状態(台)で使用した場合、その使用が社会的用途と見なされる場合(例えば、茶碗を置く等)(現実的には食器入れはテーブルの代用にはならない、しかし、ミニチュアゆえに、簡単に倒しテーブルとして使用することは可能であるため、他のものと組み合わせて使用している場合、ふりとみなして(3)と分類する。

(4) 2つのものを組み合わせた社会的用途・機能と異なるふり

調理器具類：レンジの中にスプーン等を出し入れしている場合、レンジ(4)スプーン(4)とチェックする。

(レンジからスプーンを出す目的が別にある場合、レンジはチェック対象としない。また、自分が入れた物でない物を出す行為は(7)とチェックする)。レンジに物を入れ、レンジを持ち運ぶ(レンジ(4)もの(4)レンジ持ち運ぶ(2)とチェック)鍋から食べる(これはフォークを用いるかスプーンを用いるかに関係なく)は異なるふりとする(鍋類は食器ではないので)。スプーンをレンジに入れ、レンジの扉をしてレンジを床に置く(「スプーンをレンジに入れる」のみをチェック対象とする)。ポットから皿に注ぐ(皿は液体を入れることには不適切)フライパンで床から何かをすくって皿に入れる。鍋に蓋をしてカチカチいわせる。ポットにフォークを入れる(入れると取り出すの間にふりが入らない場合は「取り出す」はカウントしない。また抽出用が入れた物ではないフォークなどを何のふりもなしに取り出す場合は(4)ではなく(5)としてカウントする)ポットにフォークを入れかき混ぜて食べる(ポットからの直食べが一般的でないため、(4)・(4)となる)シャモジ、お玉で茶碗などの食器類をかき混ぜて食べる(かき混ぜる操作としてシャモジ、お玉(4)茶碗(4)とチェック、食べる操作としてシャモジ、お玉(4)茶碗(4)とチェックする。ただし、調理器具などをかき混ぜる場合は(3)とする)お玉で鍋をかき混ぜ、食べる(かき混ぜる操作としてお玉(3)鍋類(3)、食べる操作として鍋(4)お玉(4)とチェックする)。レンジの窓から湯呑みなどを入れようとする。スプーン(4)やフォーク(4)をレンジに詰め(4)・(4)、その中をのそく(レンジ=(4))。レンジの中に次から次へと物を入れている場合、頻度(ものに触れてからそのものを放すまでを1回とカウントする)と違って、手にしたものの扱い方について見るので、物の種類に対応してレンジを扱ったとみなす。それゆえ、スプーン3本を1本ずつレンジに入れた場合は、スプーン(4)・レンジ(4)、スプーン(4)・レンジ(4)、スプーン(4)・レンジ(4)の3組の組み合わせで物を扱ったとみなす。ただし、スプーンを3本同時にレンジに入れたときは、スプーン(4)・レンジ(4)とみなす。鍋の蓋をコップにかぶせる。

食器・食具類：スプーンでテーブルをたたく。茶碗をコンロに乗せる。茶碗などを絵本の上に置く。茶碗などをまな板に置く。重ねたお皿を手で崩す。皿の上に蓋を置く

その他：「テーブルの上にある物を払い落とす」は、遊びと見なし(4)とする。テーブルの上一面に食器を並べる。食器棚の上に物を置く。食器棚に食器などを入れて持ち歩く。食器類を投げ入れる。積み上げたものを崩す目的で積んでいる場合、ただし、積み上げているものが3個以上の場合は6としてチェックする。

(5) 3つ以上の物を組み合わせた社会的用途・機能によるふり

調理器具類：「フライパンをスプーンでかき混ぜ、そのフライパンをテーブルに置く」場合、フライパン(5)スプーンでかき混ぜ(5)、テーブルに置く(5)とチェックする。(かき混ぜるフライパンもテーブルの上におかれるフライパンも同じものなので1回のみチェック対象とする)両手鍋の蓋を開けてスプーンを入れ、その両手鍋に蓋をする場合、スプーンを入れ(5)両手鍋(5)蓋をする(5)とチェックする(蓋を開けるのはスプーンを入れるためなのでチェック対象としない)。両手鍋の蓋を取りポットから両手鍋に注ぎ、両手鍋の蓋を両手鍋にする場合、「両手鍋の蓋を取り」は、「注ぐ」ための行為(両手鍋の蓋を取る目的は注ぐことにある)であるため、チェックしない。ただし、「鍋の蓋を取る」だけの行為で終わり、「ふり」が認められない場合は(7)とチェックされる。この例の場合は、両手鍋(5)ポット注ぎ(5)、両手鍋の蓋する(5)とチェックする。ポットにフォークを入れ、テーブルに置く場合、(この場合、3つのものを扱っているが、前半と後半の扱いが異なるため、3つ以上もの扱いとみなさない。つまり、前半のポットにフォークを入れることは「異なるふり」であるためポット(4)フォークを入れる(4)とチェックする。後半のポットをテーブルに置く場合は「社会的用途・機能」であるためポット(3)テーブルに置く(3)とチェックする。)ただし、以下の例のような場合は異なる基準とする例1。(S男 2006.6.14 p1 2-41) S男は左手に持っていたまな板(5)をテーブル(5)に置き、包丁(5)でまな板の上を切る。②S男はまな板や包丁の向きを変え、豆腐などを切るような手つきで切っている。③S男は包丁でぎゅーと押し切る。④S男はまな板(5)を両手鍋(5)のところに持ってゆき、包丁(5)で切ったものを両手鍋に入れる。S男の例では「茶碗とスプーンでかき混ぜ、茶碗をテーブルに置く」とは行為の複雑さが異なっている。つまり、テーブルに置かれた茶碗は、かき混ぜられた茶碗と同じ状況にある茶碗である。しかし、S男の例では、想像のものを包丁でまな板を切り、切り刻まれたものをまな板に載せそれを包丁で鍋の中に入れ込んでいる。つまり、まな板と包丁の用途が前半と後半では異なっている。このように同一のものであってもその使われ方が一連の行動として行われている中で違っている場合はチェック対象とする。例2。(S男 2006.6.14 p4 8) 1①S男はテーブル(5)に置いたまな板(5)の上を包丁(5)で切っている。②S男はまな板を床に置きその上を包丁で切る。③K男の片手鍋(5)にまな板(5)からきったものを包丁(5)で入れる。④床のフライパン(5)にもまな板(5)から包(5)で入れる。⑤S男はもう一度かずきが差し出した片手鍋にまな板のものを包丁で入れる。⑥S男はフライパンとまな板を持ち、まな板をコンロに載せようとする。⑦S男はまな板を床に置き、フライパン(5)をコンロ(5)に載せる。⑧S男はまな板を持ちながらフライパン(5)をコンロ(5)の上で調理しているように動かす。⑨S男はコンロの上でフライパンを振ったり、上下させたりする。⑩S男はフライパン(5)をもってテーブルの方を向くとちり(女兒)に「熱いよう」という。⑪S男はフライパンをテーブルに置こうとするが、まな板の上のものをフライパンに入れるようにする。⑫S男はコンロにフライパンを置き、床にまな板を置く。解説：⑦でフライパンがコンロに載せられたとして、フライパン(5)とコンロ(5)をチェックしている。⑧でもフライパンとコンロをともに(5)と(5)としてチェックしている。これは、⑦では単にフライパンをコンロに載せた状態であり、⑧は調理している状態であり、⑦と⑧ではフライパンとコンロの関係が異なっていることに起因する。また、②のまな板と包丁をチェックしないのは、すでに①でチェックしていることによる。このように一連の活動の中で同じものの操作が複数回表出した場合、最初のもののみチェックする。

食器・食具類：茶碗を持ちスプーンでかき混ぜ、その茶碗をテーブルの上に置く(床に置く場合は、(3)-(3)となる)。

茶碗(5) スプーンでかき混ぜ(5)、テーブルの上に置く(5)となる(茶碗は同じものなので1回のみチェック)。皿を持ち(5)スプーンでかき混ぜ(5)、そのスプーンを茶碗(5)の中に入れる(スプーンは同じものなので1回のみチェック)。

(6) 3つ以上の物を組み合わせた社会的用途・機能と異なるふり

鍋の蓋を持ちスプーンの入った茶碗の中からスプーンを取り、持っていた鍋の蓋を茶碗にかぶせる。この場合、「スプーン」は鍋の蓋をするために扱ったに過ぎないため、スプーンはふりの対象とみなさない。それゆえ、この例は3つ以上の物の組み合わせた行為とはみなせない。そのため、茶碗(4)スプーンを取り(7)、鍋の蓋(4)茶碗にするとチェックする。3個以上のものを崩すことを目的に積み上げている。3個以上のもの積み上げている

(7) ふりといえない扱い

調理器具類：鍋の蓋を開け閉めする(蓋をする。蓋を取るも同様とする)。ホットの蓋をする。

レンジからスプーンなどの食具を取り出す場合、一度に複数の食具を取り出した場合は、レンジはチェック対象にしない(レンジに入れる場合はレンジは操作対象となる)。食具の扱いを1回とみなし(7)とチェックする。他者が詰めたスプーンやフォークなどをレンジから取り出す。調理器具などからスプーンなどを取り出す(ふりの意図がない場合)。レンジを床に置く(ふりの意図がない場合)。「レンジからスプーン等を取り出し床に置く」場合、一緒に複数のスプーンを握り取り出す場合は1回の操作とみなす。スプーン等を1本、1本、別々に取り出し床に置く場合は1回の施行ごとにチェックする。つまり「取り出し、置いた」回数だけチェックすることになる。

食器・食具類：スプーンを手にする。床に倒れている食器を起こす。皿を重ねて持つ。皿を重ねて持ち、床に置く。湯呑みと茶碗を並べる(特に目的が明確でない)。皿を並べる。ただし、ふりの目的を持って並べている場合は、並べている皿の数により(3)もしくは(5)とチェックする。「カップをコンロからおろす」この場合、コンロからおろす意図が抽出児に明確に認められる場合は(7)ではなく、(3)

に

該当する。しかし、その意図が不明確な場合は「持つ」と同じと見なし(7)とする。湯呑みの中に詰まった蓋をとろうとする。食器などからスプーンなどを取り出す(ふりの意図がない場合)。食器を床に置く。ただし、「カップをスプーンでかき混ぜ、そのカップを床に置く」場合、行為的にはふりがあるとみなす。カップをと茶碗を重ねる(目的が不明、遊びモードでない状況)。茶碗と湯呑みを重ねる(目的が不明、遊びモードでない状況)。

その他：食器棚からものを取り出す(取り出す目的がある場合はその目的による操作をチェック対象とする)。

食器棚を覗き込む。食器棚の板をはずしたり・はめたりする。スカートの中にものを隠す(他児にとられないために隠している場合は文脈どおりの行為とみなす)。ものを床に置く(ふりの意図がない場合)食器棚のテーブルの上にあるものをすべて床におろす」場合は、「ものすべて」のみを(7)とチェックする。テーブルの上の倒れている食器を起こす。

(8) ままごと道具の象徴的扱い

皿を2枚、逆に重ねてハンバーガーという。ままごと道具がまったく異なった用途に使用されている(例：まな板を電話やピストルなど)ただし、ままごと道具が本物の食具のように扱われる場合は、9ではなく、1、3、5とする。

(9) 観察用に用意した以外のものの扱い

調理器具類：鍋の蓋をしたカップを持つ。(鍋の蓋をした者が今コップを持っている子どもではない場合)T

と一緒に手を持ってまな板を包丁でトントンした後に抽出児が包丁でトントンした

食器・食具類：スプーンをしゃぶる・口に入れる(文脈からふりとは認めがたい)。皿を食べる(口に入れる、ふりかどうか判断がつかない場合)。湯呑みなどを上下に振る。

その他：食器棚(倒れている状態)の中に物(食器など)を落とす。観察用に持参したものとそれ以外の物を組み合わせて使用した場合、ふり遊びとして社会的用途・機能による使用であれば(3)または(5)とチェックし、それ以外の場合は(8)とチェックする。例：「紙を食器棚に入れる」紙(8)食器棚に入れる(8)とチェックする。「食器棚に膝に乗せる」食器棚の扱いは(8)とチェックする。

6. 分析の信頼性

ままごと道具の接触頻度及び扱い方の分析には、6名がかかわる。分析を開始する前に6名の分析結果の一致率が、95%を超えるまで訓練を行う。その後、2人が1組となり、お互いが別々に分析を行った後に、2人の結果を照合し、一致しなかったものについては2名で映像を視聴し、2人が同意できる結果を導き出す方法をとる。それゆえ、本研究では、すべての逐語記録についてダブルチェックを行い、100%一致する結果を得ることができている。

7. 観察回数と抽出児の年齢

資料の表1から3に、1歳時から3歳時までの3年間にわたる各抽出児の生年月日・観察日・観察日年齢・月齢・逐語記録番号を示してある。表に示したように、抽出児別の観察回数は、1歳時には最少4回、最多6回、総観察回数79回、2歳時には最少4回、最多7回、総観察回数90回、3歳時には最少3回、最多5回、総観察回数71回である。3年間を通した観察回数を見ると、最少12回、最多17回、総観察回数240回となっている。撮影回数は、抽出児によりかなりばらつきがある。これは、予定していた抽出児が観察日当日に欠席をした場合には、4名の抽出児の中で撮影当日に出席した子どもを撮影対象にしたことに起因する。

8. 解析方法

撮影されたままごと遊びの時間は、各撮影日により異なっているため、ままごと道具の接触頻度・扱い方による頻度をすべて%値に変換する。ままごと道具の接触頻度については、すべてのままごと道具の接触頻度を100とした%値に変換する。また、ままごと道具の扱いについては、個々のままごと道具について9カテゴリーの扱いの頻度を100とした%値に変換する。ままごと遊びにおける年齢的な発達的変化をみるために中央値を算出し、頻度少群と多群の2群に分け、 χ^2 検定と残差分析をおこなう。

IV 結 果

1. ままごと道具の接触頻度

各研究協力園に保育遊具として整備されているままごと道具の素材は、プラスチック製で、色彩もカラフルで大きさも比較的大きいものである。一方、観察用に使用したままごと道具は、木製で、彩色されていない、木肌色がそのまま残されているものである。観察で使用したままごと道具の大きさは、保育園に整備されていたままごと道具に比較して、いずれの道具もかなり小さいものである。たとえば、茶碗の大きさは、高さ約5cm、直径約5.5cmである。そのため、観察用に使用したままごと道具は、子どもたちにとってはなじみのないままごと道具であったと言える。3年間、毎月1回、同じままごと道具を観察時に持ち込むことで、子どもにとって玩具としての新鮮さを減衰させ、ままごと遊びが見られなくなるのではないかとの危惧を持っていた。しかし、3年間の観察期間中いずれの観察時にも、観察開始時に子どもたちがままごと道具に突進し、すぐに遊び始める姿を見ることができ、必要ない危惧であったことを実感させられる。

ここでは、子どもがままごと道具を手にしてから、それを手から放すまでの接触を単位として、それぞれのままごと道具の接触頻度を見る。そして、20種類のままごと道具に触れた総接触頻度を100として%値に換算したデータを使用して、各ままごと道具の中央値を算出する。その中央値を使い接触頻度少群と多群の2群に分け1歳時、2歳時、3歳時における差異を見る。

まず、20種類のままごと道具について、それぞれの接触頻度の中央値に注目して接触頻度における順位についてみる。ついで、1歳時・2歳時・3歳時におけるままごと道具の接触頻度について χ^2 検定および残差分析を行った結果についてみる。

(1) 接触順位について

20種類のままごと道具について接触頻度を見ると、上位6位には、皿・テーブル・カップ・スプーン・茶碗・湯呑みが、含まれている。また、下位6位に含まれるものは、しゃもじ・お玉・ポットの蓋・包丁・両手鍋・フライパンである。観察用に使用したままごと道具1セットに含まれる道具の数は、皿は10枚、カップ・茶碗・湯呑・フォーク・スプーンの5種類については各5個、鍋の蓋は2個からなる構成となっている。その他のままごと道具は、各1個の構成となっている。上位を占める皿・カップ・スプーン・茶碗・湯呑みは、いずれも1セットに10ないし5個含まれているものである。そのため、これらの道具は、単一構成の他のままごと道具よりも多くの子どもが接触する機会があることにな

る。一方、下位に含まれる道具は、いずれもセットとしては単品で構成されているものである。このように接触頻度の多少には、提供された道具自体の数の多少が、影響を与えていたことが考えられる。特に、子ども間でままごと道具の取り合いなどによる喧嘩が生じないように、観察場面には子ども 5・6 名に 1 セットのままごと道具を配置している。そのため、10 個ないし 5 個で構成されているままごと道具に関しては、相当数のままごと道具が実際の観察場面に配置されていたことになる。それゆえ、ままごと道具に対する接触頻度に関しては、子どもの興味・関心だけでなく物理的に接触する機会の多少がかなり影響を与えていたことが考えられる。

なお、上位の接触頻度を示したテーブルは、単品構成のままごと道具である。にもかかわらず多くの接触がなされた理由として、テーブル自体の大きさ、他の道具を載せる台として使用される特性などが考えられる。このように、道具自体が有する物理的特性や社会的用途・機能が、接触頻度の多少に影響を与える要因として大きく働くことが明らかになる。

(2) 接触頻度における年齢時差について

1 歳時から 3 歳時までの各年齢時における子どものままごと道具に対する接触頻度における特徴を見るため、接触頻度少群と接触頻度多群の 2 群にわけた。表 1 は、1 歳時・2 歳時・3 歳時における接触頻度多群の度数およびその%、 χ^2 検定に基づいて行った残差分析の結果の概略を示したものである。

1) 接触頻度に有意差が認められないままごと道具

表 0 に示すように 1 歳時から 3 歳時の各年齢時の間に有意差が認められなかったままごと道具は、茶碗・湯呑み・お玉・ポット・ポットの蓋・両手鍋・鍋の蓋・まな板・包丁・テーブル・食器棚の 11 種類であり、半数以上のままごと道具に有意な年齢時差が認められないことが明らかになる。これらの結果から観察に用いた多くのままごと道具は、いずれの年齢時においても同じ程度の子どもの興味・関心を引くものであったことを示している。

2) 接触頻度に有意差が認められる道具

① 年齢的発達に伴い接触頻度が多くなるもの及び多くなる傾向が見られる道具

20 種類の玩具の中でこのような特徴を示した道具は、コンロのみである。

コンロは、2 歳時で有意に接触頻度が多く、1 歳時では有意に少なくなる傾向が明らかになる ($\chi^2(2)=5.372$ $p<.068$)。

② 年齢的発達に伴い接触頻度が減少する道具

年齢的発達に伴い接触頻度が減少する特徴は、20 種類のままごと道具中 7 種類の道具に見出されている。

カップは、1 歳時で有意に接触頻度が多く、3 歳時では有意に少なくなるが明らかになる ($\chi^2(2)=18.712$ $p<.000$)。スプーンは、1 歳時で有意に接触頻度が多く、2 歳時及び 3 歳時では有意に少なくなるが明らかになる ($\chi^2(2)=16.084$ $p<.000$)。フォークは、1 歳時で有意に接触頻度が多く、2 歳時および 3 歳時では有意に少なくなるが明らかに

なる ($\chi^2(2)=32.605$ $p<.000$)。片手鍋は、1歳時で有意に接触頻度が多く、2歳時で少なくなる傾向が明らかになる ($\chi^2(2)=6.516$ $p<.038$)。フライパンは、1歳時で有意に接触頻度が多く、2歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=8.936$ $p<.011$)。レンジは、1歳時で有意に接触頻度が多く、3歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=7.081$ $p<.029$)。しゃもじは、3歳時では有意に少なくなる傾向が明らかになる ($\chi^2(2)=5.077$ $p<.079$)。

表1 各年齢時におけるままごと道具の接触頻度多群の度数と%

ままごと遊具	接触頻度多群			ままごと道具	接触頻度多群			N(%)
	1歳時	2歳時	3歳時		1歳時	2歳時	3歳時	
茶碗	43(45.6)	42(46.7)	34(49.3)	両手鍋	41(51.9)	47(52.2)	33(47.8)	
	n.s.				n.s.			
カップ	54(68.4)	42(46.7)	23(33.3)	鍋の蓋	45(57.0)	45(50.0)	30(43.5)	
	1歳時 > 3歳時				n.s.			
湯呑み	38(48.1)	45(50.0)	35(50.7)	片手鍋	49(62.0)	39(43.3)	32(46.4)	
	n.s.				1歳時 > 2歳時			
スプーン	54(68.4)	38(42.2)	27(39.1)	フライパン	47(59.5)	34(37.8)	38(55.1)	
	1歳時 > 2歳時 3歳時				1歳時 > 2歳時			
フォーク	59(74.7)	37(41.1)	21(30.4)	コンロ	31(39.2)	51(56.7)	36(52.2)	
	1歳時 > 2歳時 3歳時				1歳時 < 2歳時			
お玉	42(53.2)	46(51.1)	28(40.6)	レンジ	47(59.5)	46(51.1)	26(37.7)	
	n.s.				1歳時 > 3歳時			
しゃもじ	40(50.6)	43(47.8)	23(33.3)	まな板	33(41.8)	46(51.1)	37(53.6)	
	> 3歳時*				n.s.			
皿	37(46.8)	50(55.6)	31(44.9)	包丁	36(45.6)	50(55.6)	32(46.4)	
	> 2歳時				n.s.			
ポット	42(53.2)	48(53.3)	29(42.0)	テーブル	34(43.0)	53(58.9)	33(47.8)	
	n.s.				n.s.			
ポットの蓋	37(46.8)	51(56.7)	33(47.8)	食器棚	34(43.0)	45(50.6)	40(58.0)	
	n.s.				n.s.			

*有意傾向

このように1歳時に比較して2歳時・3歳時の方で減少する傾向が認められる理由として、接触頻度のカウント方法が関与していることが考えられる。つまり、接触頻度は、子どもが特定のままごと道具を手にしてから、そのままごと道具を手から放すまでを、接触単位として接触頻度をカウントしている。それゆえ、長い時間連続して同じ道具を扱っている

場合と、頻繁に持つことと放すことを繰り返すような扱いをしている場合を比較すると、前者の接触頻度が、後者の接触頻度よりも多く発生することになる。また、子どもが複数のままごと道具を組み合わせて使用する場合には、比較的長い時間にわたってままごと道具を手にする可能性がある。たとえば、「包丁で料理の素材をきり、それを鍋にいれて、スプーンでかき混ぜ、さらに盛り付け、食べる」というように、時系列的に行為を表出する遊びができるようになった場合について考えてみよう。その場合、遊びに使われる道具は、単に個々のままごと道具への子どもの関心ではなく、行為の目的(テーマ・ストーリー)によってそれぞれの道具の使用頻度がコントロールされることになる。つまり、その行為の目的によって、物の扱われ方が変化してゆくことになる。一方、子どもの行為の目的が、「茶碗をスプーンでかき混ぜて食べる」短い行為の連鎖段階にある場合は、短い時間の中でこの連鎖行為が何度となく繰り返されることになる。そのため、結果的にままごと道具への接触頻度が多くなることになる。つまり、子どもが、順序性のある長い連鎖で構成されている行為を行うことができるようになると、結果的に道具の接触頻度が少なくなることになる。複数の行為が連鎖している行為を表出することが可能となるためには、個々のままごと道具の社会的用途・機能を意味的に理解していることが必要になる。1歳時に比較して2歳時・3歳時の方で、ままごと道具に対する接触頻度が有意に減少するところは、ままごと道具に関する社会的用途・機能に関する理解が進み、行為を連鎖させることが可能になったことが起因していることが推察される。

2. ままごと道具の扱われ方

子どものままごと道具の扱い方を通して子どもが、生活文化の意味を具現化している姿を明らかにするとともに、その意味についてどのように体系化が図られて行くのか、その過程を明らかにするために、8つの視点から検討する。

分析視点として、①社会的用途・機能による単独のふり、②社会的用途・機能と異なる単独のふり、③2つの物を組み合わせた社会的用途・機能によるふり、④2つの物を組み合わせた社会的用途・機能と異なるふり、⑤3つ以上の物を組み合わせた社会的用途・機能によるふり、⑥3つ以上の物を組み合わせた社会的用途・機能と異なるふり、⑦ふりといえない扱い、⑧象徴的扱い、の8つのカテゴリーを設定する。

(1) 扱い方の頻度について

20種類のままごと道具が、どのような扱い方をされているかを見るために、8つのカテゴリーにおける頻度について中央値を算出し、その上位3位についてみたのが表2である。表中の「他の1つとのふり」とは、「2つの物を組み合わせた社会的用途・機能によるふり」を意味している。同様に「他の1つとの異なるふり」とは、「2つの物を組み合わせた社会的用途・機能による異なるふり」を意味している。

第1位のものに注目すると、ポットの蓋以外のすべてのものが、他のままごと道具と組み合わせた状況で扱われていることが明らかになる。ポットの蓋の扱いにおいて第1位を占めるものは、ふりといえない扱いとなっている。このカテゴリーは、物を扱う意図が、子ども側にあるのではなく、物側の偶然的な変化によって、結果的に子どもの物を扱う行為が引き出された状況における扱い方をチェックする項目である。ポットの蓋の例で言うと次のようになる。「子どもが、ポットから容器に注ごうとしてポットを傾けたときに、ポットの蓋が偶然落ちる。それを見て、子どもが落ちたポットの蓋を拾い、ポットに蓋をする。」この場合、子どものポットのふたをする行為は、「ふりといえない扱い」とみなされる。このように、ポットの蓋が「ふりといえない扱い」を受けるときは、子どもはポットの蓋とポット本体の2つを組み合わせた扱いをしている。そのため、第1位を占めたままごと道具の扱われ方は、いずれのままごと道具も2つのものを組み合わせた扱い方がされていたことにある。

しかし、その扱い方が、社会的用途・機能に即した扱いであるか、否かについてみると、ままごと道具によって大きく異なっていることが明らかになる。

茶碗・カップ・湯のみ・皿の食器、スプーン・フォークの食具、ポット・両手鍋・片手鍋・フライパンの調理器具、テーブル・食器棚の家財道具は、いずれもそれぞれの社会的用途・機能に即した扱いがなされる頻度が高いことを示している。具体的な扱い方についてみると、茶碗をスプーンでかき混ぜて食べる、ポットからカップに注いで飲む、というような扱い方が多くなされている。これらの行為が表出可能となるためには、茶碗とスプーンやポッ

トとカップが物理的に存在することが重要なのではなく、茶碗の中に食べ物を思い描き、ポットの中に注がれるものをイメージできることが2つの道具を組み合わせる行為を表出させる重要な要因となっている。また、2つの道具を組み合わせた扱い方が、社会的用途・機能に即したものであるためには、子どもがそれぞれの道具をどのように使うものであるかを理解していることが必要となる。そのことは、表中の「他の1つと異なるふり」を見ることで明らかになる。

表2 ままごと道具の扱い方において上位3位を占める中央値 %

ままごと遊具	第1位		第2位		第3位	
茶碗	他の1つとのふり	33.3	他の1つと異なるふり	19.3	ふりといえない扱い	13.6
カップ	他の1つとのふり	42.9	ふりといえない扱い	14.3	他の1つと異なるふり	13.0
湯呑み	他の1つとのふり	40.0	ふりといえない扱い	17.7	他の1つと異なるふり	15.0
スプーン	他の1つとのふり	38.1	他の1つと異なるふり	12.5	ふりといえない扱い	10.1
フォーク	他の1つとのふり	33.3	他の1つと異なるふり	16.7	ふりといえない扱い	13.3
お玉	他の1つと異なるふり	25.7	他の1つとのふり	14.6		
しゃもじ	他の1つと異なるふり	30.8	他の1つとのふり	9.1		
皿	他の1つとのふり	33.3	ふりといえない扱い	18.2	他の1つと異なるふり	16.7
ポット	他の1つとのふり	48.6	他の1つと異なるふり	16.7	他の1つと異なるふり	7.1
ポットの蓋	ふりといえない扱い	26.1	他の1つとのふり	25.0		
両手鍋	他の1つとのふり	40.0	ふりといえない扱い	7.1		
鍋の蓋	他の1つと異なるふり	33.3	他の1つとのふり	25.0	ふりといえない扱い	16.7
片手鍋	他の1つとのふり	37.8	他の1つと異なるふり	12.5	ふりといえない扱い	8.7
フライパン	他の1つとのふり	40.0	他の1つと異なるふり	4.8		
コンロ	他の1つと異なるふり	25.0	他の1つとのふり	20.0	ふりといえない扱い	14.3
レンジ	他の1つと異なるふり	46.5	ふりといえない扱い	20.0	他の1つとのふり	3.2
まな板	他の1つとのふり	33.3	他の1つと異なるふり	25.0	ふりといえない扱い	7.7
包丁	他の1つと異なるふり	33.3	他の1つとのふり	25.0	ふりといえない扱い	8.3
テーブル	他の1つとのふり	66.2	他の2つ以上とのふり	4.5	他の1つと異なるふり	2.4
食器棚	他の1つとのふり	38.2	他の1つと異なるふり	10.0	ふりといえない扱い	9.8

たとえば、しゃもじやお玉について見ると、スプーンのように食器をかき混ぜる道具として扱う扱い方あるいは食器から食べる道具として扱う扱い方が多く認められる。このような扱いは、しゃもじやお玉の社会的な用途・機能を理解したうえで、スプーンの代用と

して使用していると考えよりも、しゃもじやお玉の社会的用途・機能を理解しておらず、むしろ形態的類似性からスプーンと同じような扱い方をしていると考えることが妥当であろう。また、包丁に関しては、「切る」ための物としての社会的用途・機能の理解がなされている一方で、スプーンやお玉のように容器をかき混ぜる道具として扱い、食器などから食べる食具のような扱い方が認められる。このような結果から、物の社会的用途・機能を十分に理解していない段階では、形態的類似性が物の扱い方に関する重要な情報となることが推察される。レンジの扱い方で非常に多く認められるものは、スプーン・フォークなど手当たり次第にレンジの中に詰め込む行為である。この場合、レンジ自体は、扉面が上向きに倒された状態で物の出し入れがなされており、レンジの形状から物入れとして扱われていることが推察される。レンジの扉面についているダイヤル操作を行うなど、子どもがレンジをレンジと認識して扱っていることが推測できる行為を表出する一方で、レンジの中に入れられる物が社会的用途・機能とは異なっていることがしばしば認められる。このことから、先に指摘したように子どもにとっては、まず物の形状が扱い方に関する重要な情報的意味を持っていることを示している。そのため、物の名称や物を識別できると、社会的用途・機能を理解することとは、大きな隔りがあることが明らかになる。特に、社会的用途・機能に関してはふりとしてその用途・機能を引き出すためには、「もの」をイメージできることが非常に重要であることが推察される。

(2) 扱いにおける年齢時差について

1歳時・2歳時・3歳時における扱い方に関する発達的変化を見るために、中央値を使い8つの扱い方についての頻度少群と多群の2群にわけ、 χ^2 検定と残差分析を行う。表3から5は、ままごと道具20種類について8種類の扱い方における扱い頻度多群における各年齢時の度数とその%および χ^2 検定に基づいて残差分析を行った結果を示したものである。表中の「他の1つとのふり」とは、「2つの物を組み合わせた社会的用途・機能によるふり」を意味している。同様に「他の3つ以上とのふり」とは、「3つ以上の物を組み合わせた社会的用途・機能によるふり」を意味している。「他の2つ以上との異なるふり」「他の2つ以上との異なるふり」も同様である。それぞれのままごと道具別に結果を見てゆく。

1) 茶碗

- ①社会的用途・機能による単独のふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。
- ②社会的用途・機能と異なる単独のふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、2歳時・3歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=14.298$ $p<.001$)。
- ③他の1つによる社会的用途・機能によるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。
- ④他の1つによる社会的用途・機能と異なるふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、2歳時・3歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=27.902$)。

p<.001)。

⑤他の2つ以上による社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、3歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=6.644$ p<.05)。

⑥他の2つ以上による社会的用途・機能と異なるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

⑦ふりといえない扱い：このような扱いは、2歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=19.787$ p<.000)。

⑧象徴的扱い：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

2) カップ

①社会的用途・機能による単独のふり：このような扱いは、1歳時で有意に多いことが明らかになる ($\chi^2(2)=8.729$ p<.05)。

②社会的用途・機能と異なる単独のふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、3歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=38.060$ p<.001)。

③他の1つによる社会的用途・機能によるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

④他の1つによる社会的用途・機能と異なるふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、3歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=15.890$ p<.001)。

⑤他の2つ以上による社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、2歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=8.742$ p<.05)。

⑥他の2つ以上による社会的用途・機能と異なるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

⑦ふりといえない扱い：このような扱いは、2歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=23.311$ p<.001)。

⑧象徴的扱い：このような扱いは、3歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=12.827$ p<.01)。

3) 湯呑み

①社会的用途・機能による単独のふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

②社会的用途・機能と異なる単独のふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、3歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=13.013$ p<.001)。

③他の1つによる社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、3歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=8.165$ p<.05)。

④他の1つによる社会的用途・機能と異なるふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、2歳時・3歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=16.574$ p<.001)。

⑤他の2つ以上による社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、3歳時で有

意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=14.714$ $p<.001$)。

⑥他の2つ以上による社会的用途・機能と異なるふり：このような扱いは、1歳時に有意に少ないことが認められる ($\chi^2(2)=6.542$ $p<.05$)。

⑦ふりといえない扱い：このような扱いは、2歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=13.847$ $p<.001$)。

⑧象徴的扱い：このような扱いは、3歳時で有意に多く、1歳時・2歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=26.672$ $p<.001$)。

4)スプーン

①社会的用途・機能と会的用途・機能による単独のふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、2歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=8.855$ $p<.012$)。

②社会的用途・機能と異なる単独のふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、2歳時・3歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=18.166$ $p<.001$)。

③他の1つによる社会的用途・機能によるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

④他の1つによる社会的用途・機能と異なるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

⑤他の2つ以上による社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、2歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなる傾向が明らかになる ($\chi^2(2)=5.681$ $p<.1$)。

⑥他の2つ以上による社会的用途・機能と異なるふり：このような扱いは、2歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなる傾向が明らかになる ($\chi^2(2)=4.900$ $p<.1$)。

⑦ふりといえない扱い：このような扱いは、2歳時に多く、1歳時に有意に少ないことが明らかになる ($\chi^2(2)=12.680$ $p<.01$)。

⑧象徴的扱い：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

5)フォーク

①社会的用途・機能による単独のふり：このような扱いは、3歳時で有意に少ない傾向が明らかになる ($\chi^2(2)=4.789$ $p<.1$)。

②社会的用途・機能と異なる単独のふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、2歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=10.001$ $p<.01$)。

③他の1つによる社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、3歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=10.949$ $p<.01$)。

④他の1つによる社会的用途・機能と異なるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

⑤他の2つ以上による社会的用途・機能によるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

⑥他の2つ以上による社会的用途・機能と異なるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

⑦ふりといえない扱い：このような扱いは、2歳時・3歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=20.621$ $p<.001$)。

⑧象徴的扱い：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

6)お玉

①社会的用途・機能による単独のふり：このような扱いは、3歳時に有意に多い傾向が認められる ($\chi^2(2)=5.538$ $p<.1$)。

②社会的用途・機能と異なる単独のふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、3歳時には有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=12.291$ $p<.01$)。

③他の1つによる社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、1歳時で有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=8.678$ $p<.05$)。

④他の1つによる社会的用途・機能と異なるふり：このような扱いは、3歳時で有意に少ないことが明らかになる ($\chi^2(2)=6.740$ $p<.05$)。

⑤他の2つ以上による社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、3歳時で有意に多く、1歳時には有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=11.831$ $p<.01$)。

⑥他の2つ以上による社会的用途・機能と異なるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

⑦ふりといえない扱い：このような扱いは、2歳時で有意に多く、1歳時には有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=12.971$ $p<.01$)。

⑧象徴的扱い：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

7)しゃもじ

①社会的用途・機能による単独のふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

②社会的用途・機能と異なる単独のふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

③他の1つによる社会的用途・機能によるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

④他の1つによる社会的用途・機能と異なるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

⑤他の2つ以上による社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、3歳時で有意に多く、1歳時には有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=10.262$ $p<.01$)。

⑥他の2つ以上による社会的用途・機能と異なるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

⑦ふりといえない扱い：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

⑧象徴的扱い：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

8)皿

①社会的用途・機能による単独のふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

②社会的用途・機能と異なる単独のふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、3歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=37.453$ $p<.001$)。

③他の1つによる社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、3歳時の間に有意に少ない傾向が認められる ($\chi^2(2)=5.218$ $p<.1$)。

④他の1つによる社会的用途・機能と異なるふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、3歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=31.196$ $p<.001$)。

⑤他の2つ以上による社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、2歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=6.127$ $p<.05$)。

⑥他の2つ以上による社会的用途・機能と異なるふり：このような扱いは、2歳時に有意に多く、3歳時に有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=6.916$ $p<.05$)。

⑦ふりといえない扱い：このような扱いは、2歳時・3歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=41.102$ $p<.001$)。

⑧象徴的扱い：このような扱いは、3歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=6.272$ $p<.05$)。

9)ポット

①社会的用途・機能による単独のふり：このような扱いは、1歳時では有意に少なくなる傾向が明らかになる ($\chi^2(2)=5.018$ $p<.1$)。

②社会的用途・機能と異なる単独のふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、3歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=16.830$ $p<.001$)。

③他の1つによる社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、1歳時で有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=6.106$ $p<.05$)。

④他の1つによる社会的用途・機能と異なるふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、2歳時・3歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=16.287$ $p<.001$)。

⑤他の2つ以上による社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、1歳時で有意に少ない傾向が明らかになる ($\chi^2(2)=5.414$ $p<.1$)。

⑥他の2つ以上による社会的用途・機能と異なるふり：このような扱いは、2歳時で有意に多く、3歳時では有意に少なくなる傾向が明らかになる ($\chi^2(2)=5.671$ $p<.1$)。

⑦ふりといえない扱い：このような扱いは、2歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=14.553$ $p<.001$)。

⑧象徴的扱い：このような扱いは、1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏り

は認められない。

10)ポットの蓋

- ①社会的用途・機能による単独のふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。
- ②社会的用途・機能と異なる単独のふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。
- ③他の1つによる社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、3歳時で有意に多く、2歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=14.128$ $p<.001$)。
- ④他の1つによる社会的用途・機能と異なるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。
- ⑤他の2つ以上による社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、3歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=8.466$ $p<.05$)。
- ⑥他の2つ以上による社会的用途・機能と異なるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。
- ⑦ふりといえない扱い：このような扱いは、2歳時で有意に多く、1歳時・3歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=26.087$ $p<.001$)。
- ⑧象徴的扱い：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

11)両手鍋

- ①社会的用途・機能による単独のふり：このような扱いは、3歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=25.910$ $p<.001$)。
- ②社会的用途・機能と異なる単独のふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、3歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=8.937$ $p<.05$)。
- ③他の1つによる社会的用途・機能によるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。
- ④他の1つによる社会的用途・機能と異なるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。
- ⑤他の2つ以上による社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、3歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=17.242$ $p<.001$)。
- ⑥他の2つ以上による社会的用途・機能と異なるふり：このような扱いは、2歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=6.990$ $p<.05$)。
- ⑦ふりといえない扱い：このような扱いは、2歳時で有意に多く、1歳時で有意に少ないことが明らかになる ($\chi^2(2)=20.545$ $p<.001$)。
- ⑧象徴的扱い：このような扱いは、3歳時で有意に多いことが明らかになる ($\chi^2(2)=11.402$ $p<.01$)。

12)鍋の蓋

- ①社会的用途・機能による単独のふり：このような扱いは、3歳時で有意に多く、1歳時で有意に少ないことが明らかになる ($\chi^2(2)=10.497$ $p<.01$)。
- ②社会的用途・機能と異なる単独のふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、3歳時では有意に少なくなるが明らかになる ($\chi^2(2)=8.476$ $p<.05$)。
- ③他の1つによる社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、2歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなる傾向が明らかになる ($\chi^2(2)=4.897$ $p<.1$)。
- ④他の1つによる社会的用途・機能と異なるふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、3歳時では有意に少なくなるが明らかになる ($\chi^2(2)=14.718$ $p<.001$)。
- ⑤他の2つ以上による社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、3歳時で有意に多く、1歳時で優位に少ないことが明らかになる ($\chi^2(2)=9.610$ $p<.01$)。
- ⑥他の2つ以上による社会的用途・機能と異なるふり：このような扱いは、2歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなる傾向が明らかになる ($\chi^2(2)=5.970$ $p<.1$)。
- ⑦ふりといえない扱い：このような扱いは、2歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなるが明らかになる ($\chi^2(2)=23.625$ $p<.001$)。
- ⑧象徴的扱い：このような扱いは、3歳時で有意に多いことが明らかになる ($\chi^2(2)=11.441$ $p<.01$)。

13)片手鍋

- ①社会的用途・機能による単独のふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。
- ②社会的用途・機能と異なる単独のふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、3歳時では有意に少なくなるが明らかになる ($\chi^2(2)=29.156$ $p<.001$)。
- ③他の1つによる社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、1歳時で有意に少なくなる傾向が明らかになる ($\chi^2(2)=5.798$ $p<.1$)。
- ④他の1つによる社会的用途・機能と異なるふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、3歳時では有意に少なくなるが明らかになる ($\chi^2(2)=12.729$ $p<.01$)。
- ⑤他の2つ以上による社会的用途・機能によるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。
- ⑥他の2つ以上による社会的用途・機能と異なるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。
- ⑦ふりといえない扱い：このような扱いは、2歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなるが明らかになる ($\chi^2(2)=11.672$ $p<.01$)。
- ⑧象徴的扱い：このような扱いは、3歳時に有意に多いことが明らかになる ($\chi^2(2)=7.278$ $p<.05$)。

14)フライパン

- ①社会的用途・機能による単独のふり：このような扱いは、3歳時で有意に多く、1

歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=16.095$ $p<.001$)。

②社会的用途・機能と異なる単独のふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、3歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=17.049$ $p<.001$)。

③他の1つによる社会的用途・機能によるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

④他の1つによる社会的用途・機能と異なるふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、3歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=7.891$ $p<.05$)。

⑤他の2つ以上による社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、3歳時で有意に多く、1歳時・2歳時で有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=18.269$ $p<.001$)。

⑥他の2つ以上による社会的用途・機能と異なるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

⑦ふりといえない扱い：このような扱いは、2歳時・3歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=22.917$ $p<.001$)。

⑧象徴的扱い：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

15)コンロ

①社会的用途・機能による単独のふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

②社会的用途・機能と異なる単独のふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、3歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=18.798$ $p<.001$)。

③他の1つによる社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、3歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなる傾向が明らかになる ($\chi^2(2)=5.799$ $p<.1$)。

④他の1つによる社会的用途・機能と異なるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

⑤他の2つ以上による社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、3歳時で有意に多く、1歳時で有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=6.909$ $p<.05$)。

⑥他の2つ以上による社会的用途・機能と異なるふり：このような扱いは、2歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=7.144$ $p<.05$)。

⑦ふりといえない扱い：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

⑧象徴的扱い：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

16)レンジ

①社会的用途・機能による単独のふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

②社会的用途・機能と異なる単独のふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、3

歳時で有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=7.367$ $p<.05$)。

③他の1つによる社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、2歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=8.347$ $p<.05$)。

④他の1つによる社会的用途・機能と異なるふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、2歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=24.609$ $p<.001$)。

⑤他の2つ以上による社会的用途・機能によるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

⑥他の2つ以上による社会的用途・機能と異なるふり：このような扱いは、2歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=7.394$ $p<.05$)。

⑦ふりといえない扱い：このような扱いは、2歳時・3歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=50.611$ $p<.001$)。

⑧象徴的扱い：このような扱いは、3歳時で有意に多くなる傾向が明らかになる ($\chi^2(2)=5.604$ $p<.1$)。

17)まな板

①社会的用途・機能による単独のふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

②社会的用途・機能と異なる単独のふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

③他の1つによる社会的用途・機能によるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

④他の1つによる社会的用途・機能と異なるふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、3歳時で有意に少なくなる傾向が認められる ($\chi^2(2)=5.745$ $p<.1$)。

⑤他の2つ以上による社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、3歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=23.835$ $p<.001$)。

⑥他の2つ以上による社会的用途・機能と異なるふり：このような扱いは、3歳時で有意に多く、1歳時で有意に少なくなる傾向が認められる ($\chi^2(2)=6.629$ $p<.05$)。

⑦ふりといえない扱い：このような扱いは、3歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=6.625$ $p<.05$)。

⑧象徴的扱い：このような扱いは、3歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=14.184$ $p<.001$)。

18)包丁

①社会的用途・機能による単独のふり：このような扱いは、3歳時で有意に多く、1歳児・2歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=17.600$ $p<.001$)。

②社会的用途・機能と異なる単独のふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、

3歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=11.312$ $p<.003$)。

③他の1つによる社会的用途・機能によるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

④他の1つによる社会的用途・機能と異なるふり：このような扱いは、1歳時に有意に多く、3歳時に有意に少ないことが明らかになる ($\chi^2(2)=11.357$ $p<.01$)。

⑤他の2つ以上による社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、3歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=15.874$ $p<.001$)。

⑥他の2つ以上による社会的用途・機能と異なるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

⑦ふりといえない扱い：このような扱いは、3歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=6.128$ $p<.05$)。

⑧象徴的扱い：このような扱いは、3歳時で有意に多いことが明らかになる ($\chi^2(2)=6.987$ $p<.05$)。

19)テーブル

①社会的用途・機能による単独のふり：このような扱いは、1歳時で有意に多い傾向が明らかになる ($\chi^2(2)=5.351$ $p<.1$)。

②社会的用途・機能と異なる単独のふり：このような扱いは、1歳時に有意に多く、3歳時で有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=10.995$ $p<.01$)。

③他の1つによる社会的用途・機能によるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

④他の1つによる社会的用途・機能と異なるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

⑤他の2つ以上による社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、2歳時・3歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=17.647$ $p<.001$)。

⑥他の2つ以上による社会的用途・機能と異なるふり：このような扱いは、2歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=10.896$ $p<.01$)。

⑦ふりといえない扱い：このような扱いは、2歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=20.741$ $p<.001$)。

⑧象徴的扱い：このような扱いは、3歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなる傾向が明らかになる ($\chi^2(2)=5.738$ $p<.1$)。

20)食器棚

①社会的用途・機能による単独のふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。

- ②社会的用途・機能と異なる単独のふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。
- ③他の1つによる社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、1歳時で有意に多く、2歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=10.331$ $p<.01$)。
- ④他の1つによる社会的用途・機能と異なるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。
- ⑤他の2つ以上による社会的用途・機能によるふり：このような扱いは、3歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=24.690$ $p<.001$)。
- ⑥他の2つ以上による社会的用途・機能と異なるふり：1歳時・2歳時・3歳時の間に有意な度数の偏りは認められない。
- ⑦ふりといえない扱い：このような扱いは、2歳時・3歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=52.617$ $p<.001$)。
- ⑧象徴的扱い：このような扱いは、3歳時で有意に多く、1歳時では有意に少なくなることが明らかになる ($\chi^2(2)=7.919$ $p<.05$)。

(3) ふりの違いについて

1) 社会的用途・機能によるふり

それぞれそのままごと道具に対して社会的用途・機能に即した扱い方ができるということは、それぞれの道具に関する生活文化としての意味を理解していることを示している。つまり、単独のふりができるということはその道具単体としての社会的用途・機能を理解した扱い方をしていることを示す。また2つの道具を組み合わせた扱い方で社会的用途・機能に即した扱いができるということは、単体としての社会的用途・機能の理解だけでなく2つの物の関係性を理解していることを示している。さらに、3つ以上の道具を組み合わせて扱う場合は3つの道具の関係性を理解して扱っていることを示している。

これら3つのふりにおける年齢間差を見るために単独のふり、2つの物を組み合わせた社会的用途・機能によるふり、3つ以上の物を組み合わせた社会的用途・機能によるふりについて再度検討する。

まず、単独のふりについて年齢間差が認められないままごと道具は、茶碗・湯呑み・しゃもじ・ポットの蓋・片手鍋・コンロ・レンジ・まな板・食器棚の9種類である。また、3歳時に単独のふりが多く見られる道具は、お玉・両手鍋・鍋の蓋・フライパン・包丁の5種類である。1歳時に単独のふりが多く見られる道具は、カップ・スプーン・ポット・テーブルの4種類である。さらに、2歳時及び3歳時に単独のふりが減少する道具は、フォーク・皿の2種類である。

2つのままごと道具を扱ったふりで年齢間差が認められない道具は、茶碗・カップ・スプーン・しゃもじ・両手鍋・フライパン・まな板・包丁・テーブルの9種類である。1歳時に

2つのままごと道具を扱ったふりの多く見られる道具は、フォーク・食器棚の2種類である。2歳時に2つのままごと道具を扱ったふりが多く見られる道具は、鍋の蓋・レンジの2種類である。3歳時に2つのままごと道具を扱ったふりが多く見られる道具は、ポットの蓋・コンロの2種類である。逆に3歳時で2つのままごと道具を扱ったふりが減少する道具は、湯呑み・フォーク・皿の3種類である。

3つ以上のままごと道具を使ったふりで有意差が見られないものは、フォーク・片手鍋・レンジの3種類である。1歳時でこれらの扱いが有意に多く認められる道具はない。2歳時にこれらの扱いが有意に多く認められる道具は、カップ・スプーン・皿・テーブルの4種類である。3歳時にこれらの扱いが有意に多く見られる道具は、茶碗・お玉・しゃもじ・ポットの蓋・両手鍋・鍋の蓋・フライパン・コンロ・包丁・食器棚の10種類である。

単独のふりの扱い方としては、1歳時ではカップ・スプーン・ポット・湯のみ・茶碗・皿が多く、これらの物に生活文化として託されている社会的用途・機能に即した扱い方を示している。この結果は、ままごと道具の種類の違いによりその扱われ方に顕著な差が見られることを示している。子どもの年齢による差について見る。まず、単独での扱い方について見ると、どの年齢時にも単独で扱われることが多く、年齢による差がない道具と、単独で扱われる頻度そのものが低いために年齢時差が認められない道具がある。茶碗や湯呑みなどは、単独で扱われることが多く、ポットの蓋、片手鍋、コンロ、レンジ、まな板、食器棚は、いずれの年齢時でもその扱い方の頻度が低いことで、年齢時差が明白に認められない。これらの道具は、もともと単独でその社会的用途・機能を果たすものではないことに起因している。次に、2つのものを組み合わせた扱いについてみると、単独の場合と異なりその扱い方の頻度は、いずれの年齢時においても相対的に高い値を示している。扱い頻度における年齢時差を生じさせる要因として、1つはポットとポットの蓋に見られるように、道具同士のセット関係が理解されていることが大きく影響を与えている。このことは、ポットの蓋の扱いに注目すると明白になる。単独の道具としてポットの蓋の扱いは、いずれの年齢時においても低い値を示しており、有意な年齢時差は認められない。しかし、2つの道具を扱う比率を見ると年齢時差が顕著に認められる。これは、1歳時・2歳時に比較して3歳時ではポットの蓋をポット本体に組み合わせて扱われることが多いことによる。このように3歳時では、固定的なあるいはセットの関係性をもつ道具同士についての理解が進んでいることを示している。さらに、2つの道具の組み合わせについて見た場合、スプーン、湯呑み、皿など、1歳時に身近で接する機会の多い道具に関しては、2つの道具を組み合わせた扱いは、1歳時の方が3歳時よりも多く認められる。逆にコンロと他の道具を組み合わせた扱いは、1歳時より3歳時の方が有意に多いことが認められ、先ほどのポットの蓋も2歳時と3歳時の間で有意差が認められている。ポット自体の社会的用途・機能に関しては蓋を組み合わせて扱うかどうかによって、ポット自体の社会的用途・機能に大きな違いが生じるわけではない。ポットには蓋があるのが常態という理解によって蓋を組み合わせる必然的意味が生じてくる。一方、コンロの社会的用途・機

能についてみた場合、ポットとは異なりコンロ自体を単独で扱うことはない。多くの場合は調理器具である鍋などと組み合わせて扱うことで、その社会的用途・機能が活かされることになる。物によってはポットと蓋のセット関係とは異なる関係の理解が必要とされ、3歳時になるとこれらの意味理解が顕著に進むことを示している。3つ以上の道具を組み合わせた扱いは、3歳時の方で有意に高い比率を示している。特に、両手鍋、テーブル、フライパン、湯呑み、皿などが、他の2つの道具と組み合わせて扱われることが多くなる。3つ以上の道具を組み合わせて扱う場合は、2つの道具を組み合わせて使う場合と基本的な違いがある。それは、2つの道具を組み合わせた扱いの場合は、「茶碗にスプーンを入れてかき混ぜる」などのように、2つの道具を同時扱いすることが多い。それに対して3つの道具を扱う場合は「両手鍋をスプーンでかき混ぜ、スプーンで皿に盛り付け、皿からスプーンで食べる」というように複数の行為が、時系列的順序を持って展開される中で複数の道具が扱われることが多い。このように扱う道具が、2つの場合と3つ以上の場合では道具の社会的用途・機能についての理解と、その体系化に大きな違いがあることが示唆される。

また、1歳時のままごと道具の扱いを見ると、ままごと道具の扱いは2つの道具を組み合わせた扱い方が最も高い値を示し、単独のふりと3つ以上のふりのいずれも減少する特徴を有している。そして、その分布は、単独のふりの方に偏っていることが明らかになる。また、茶碗、スプーン、ポットは、明らかに単独の道具として扱われることが多く、この年齢時では、ままごと道具の扱いとして社会的用途・機能に見合った扱いをする場合、単独の扱い方から2つの道具を組み合わせた扱い方への移行期にあることが明らかとなる。2歳時でも2つの道具を組み合わせた扱い方が多く認められる。その分布は、3つ以上の道具を組み合わせた扱いの方に偏っているものが多い。このことから、2歳時で社会的用途・機能に見合った扱い方では、2つの道具を組み合わせた扱いから、3つ以上の道具を組み合わせた扱い方への移行期にあることが明らかになる。3歳時で社会的用途・機能に見合った扱い方におけるままごと道具の扱いを見ると、単独のふり→2つの物を組み合わせた社会的用途・機能によるふり→、3つ以上の物を組み合わせた社会的用途・機能によるふりへと、明らかな上昇傾向を示すものと、最も高い値を示す扱いは、2つの道具を組み合わせた扱い方となっている。その分布は、3つ以上の道具を組み合わせた扱いの方に偏っているものが多い。このことから3歳時には、3つ以上の道具を組み合わせた扱いができるレベルに到達していることが明らかになる。

2) 社会的用途・機能と異なるふり

ままごと道具の扱いにおける社会的用途・機能と異なる扱いとは、いわゆる大人の扱いと異なる扱いがなされている場合をいう。それぞれのままごと道具を単独で扱う扱い方を見ると、1歳時において社会的用途・機能と異なる扱いが多く認められる。このことは、1歳時では、ままごと道具の社会的用途・機能についての理解そのものが十分になされていないことを示している。年齢時差が顕著に認められない道具は、しゃもじ、ポットの蓋、

食器棚である。食器棚の扱いは、比較的多く認められる。しかし、しゃもじ、ポットの蓋は、いずれの年齢時でも比率が低く、単独での扱いが少ないという特徴を有している。これらのままごと道具に関しては、先に社会的用途・機能のふりのところで指摘したことと同じ要因が指摘される。つまり、これらの道具は、いずれも単独で扱われるそのことが基本的に少ない特性をもったものである。2つの道具を組み合わせた扱いについても1歳の方が、3歳時よりも高い比率を示し、社会的用途・機能と異なる扱いが多く認められる。これはある意味、当然の結果と考えられる。単独の道具について社会的用途・機能を理解していない状態で、2つの道具を組み合わせた場合、結果的に社会的用途・機能と異なる扱い方の頻度が増加するのは当然のことと考えられる。社会的用途・機能と異なる扱い方においては、3つ以上の道具を組み合わせた扱い方の比率は少なくなっている。これは、先に社会的用途・機能のふりのところでも見たように、3つ以上の道具を組み合わせた扱いをするためには、道具の扱い方に関して時系列的関係について意識化している必要がある。そのため異なるふりの段階では、偶然に2つの道具を組み合わせた扱いをする頻度に比較して、3つ以上の道具を組み合わせた扱いが少なくなると考えられる。

また、それぞれのままごと道具について社会的用途・機能とは異なる扱い方を見ると、1歳時では2つの道具を組み合わせた扱いが多く最も高い値を示すのは、他の1つの道具を組み合わせた扱いのところにあり、その分布は単独の扱いの方に偏っている。このことから、1歳時では社会的用途・機能と異なる扱いをする場合、2つの道具を組み合わせた扱いが多いもののまだ、単独の扱い方も多いことが明らかになる。2歳時及び3歳時でもやはりままごと道具の扱い方で最も高い値を示すのは、2つの道具を組み合わせた扱い方である。また、2歳時及び3歳時の特徴は、3つ以上の道具を社会的用途・機能と異なる扱いが、急激な減少を示すことにある。

3) ふりといえない扱いと象徴的扱い

ふりといえない扱いは、1歳時と2歳時の間に有意差が認められる。ふりといえない扱いとは、子ども自身による意図的な扱いではなく、道具の方の変化によって結果的に子どもから道具への関わりが引き出されるような状況に依存した扱い方をいう。このことから道具の扱いが多くなる2歳時に多く認められるものと考えられる。この点についてはさらに検討する必要がある。

象徴的扱いとは、ままごと道具に付与されている社会的用途・機能とはまったく異なる見立てが行われる場合の扱い方をいう。たとえば、湯呑みを大根に見立てて包丁で切る、まな板を携帯電話に見立てる、まな板をピストルに見立てる、まな板を本に見立てる、包丁を鉛筆に見立てる、スプーンをお金に見立てるなど、多くの見立てが3歳時に認められる。このような見立てに関して、物Aが物Bで「あるかのように」扱う扱い方をいう。この見立ての操作は「変換」と呼ばれており、この「変換」を可能にするものは、現実世界における事物、動物、人物、出来事に関する知識であるといわれている(高橋 1984)。このことが

ら、ままごと道具をまったく別の物に見立てることができるということは、見立てる物と、見立てられる物の社会的用途・機能に関する理解が、十分になされて初めて可能となる扱い方である。3歳時にこの理解が顕著に進むことが明らかになる。

(4) まとめ

ままごと道具の扱い方について8つのカテゴリーを設定し、子どもの年齢的発達に伴ってどのように変化するかについて検討する。

その結果、20種類のままごと道具の扱いは、2つの物を組み合わせた扱いが最も多いことが明らかになる。しかし、社会的用途・機能に即した扱い方がされているかどうかをみると、ままごと道具により顕著な違いがあることが明らかになる。扱い方における年齢時差について見ると、社会的な用途・機能に即した扱い方については子どもの身近にある物の方がこのような扱われ方がされやすいこと、子どもの年齢的発達に伴って組み合わせで扱われるままごと道具の種類が増加してゆくことが明らかになる。特に、3つ以上の物を組み合わせて遊ばれるようになるままごと道具の種類数は、2歳と3歳の間に急激な増加を示す。従来は、2歳代にスクリプトの獲得期と変革期あると指摘されていた(例えば、吉水、吉澤ら)が、本結果はむしろ3歳代にままごと遊びだけでなく、子どもを取りまく生活に関するスクリプトも急速に獲得されることを示唆している。データ処置の年齢幅をもう少し狭い間隔で詳細に検討する必要があるように思われる。

表3 各年齢時のままごと道具の社会的用途・機能によるふり頻度多群の度数と% *有意傾向あり

ままごと遊具	単独のふり			他の1つとのふり			他の2つ以上とのふり		
	1歳時	2歳時	3歳時	1歳時	2歳時	3歳時	1歳時	2歳時	3歳時
茶碗	33(44.0)	34(40.0)	31(47.7)	39(52.0)	52(61.2)	31(47.7)	18(24.0)	30(35.3)	29(44.6)
	n.s.			n.s.			1歳時 < 3歳時		
カップ	50(63.3)	38(44.2)	25(41.0)	44(55.7)	40(46.5)	28(45.9)	26(32.9)	48(55.8)	28(45.9)
	1歳時 >			n.s.			1歳時 < 2歳時		
湯呑み	40(52.6)	47(54.0)	24(39.3)	43(56.6)	48(55.2)	21(34.4)	16(21.1)	30(34.5)	32(52.5)
	n.s.			> 3歳時			1歳時 < 3歳時		
スプーン	48(60.8)	32(38.6)	25(42.4)	41(51.9)	41(49.4)	28(47.5)	25(31.6)	41(49.4)	27(45.8)
	1歳時 > 2歳時			n.s.			1歳時 < 2歳時*		
フォーク	27(36.0)	21(30.0)	8(17.4)	46(61.3)	36(51.4)	14(30.4)	15(20.0)	22(31.4)	14(30.4)
	> 3歳時*			1歳時 > 3歳時			n.s.		
お玉	0(0.0)	1(1.9)	3(8.8)	15(32.6)	30(57.7)	21(61.8)	5(10.9)	12(23.1)	15(44.1)
	< 3歳時*			1歳時 <			1歳時 < 3歳時		
しゃもじ	1(2.7)	2(4.7)	2(8.3)	17(45.9)	24(55.8)	11(45.8)	1(2.7)	8(18.6)	8(33.3)
	n.s.			n.s.			1歳時 < 3歳時		
皿	33(41.8)	25(27.8)	25(37.9)	46(58.2)	51(56.7)	27(40.9)	30(38.0)	51(56.7)	34(51.5)
	> 2歳時			> 3歳時*			1歳時 < 2歳時		
ポット	4(6.5)	15(19.5)	9(17.0)	23(37.1)	43(55.8)	30(56.6)	18(29.0)	34(44.2)	26(49.1)
	1歳時* >			1歳時 <			1歳時* <		
ポットの蓋	0(0.0)	2(3.1)	3(7.5)	17(39.5)	26(40.6)	30(75.0)	3(7.0)	9(14.1)	12(30.0)
	n.s.			2歳時 < 3歳時			1歳時 < 3歳時		
両手鍋	1(1.9)	7(12.3)	16(40.0)	28(51.9)	30(52.6)	17(42.5)	11(20.4)	22(38.6)	25(62.5)
	1歳時 < 3歳時			n.s.			1歳時 < 3歳時		
鍋の蓋	1(1.5)	2(2.7)	7(14.0)	27(40.3)	43(58.9)	24(48.0)	12(17.9)	16(21.9)	21(42.0)
	1歳時 < 3歳時			1歳時 < 2歳時*			1歳時 < 3歳時		
片手鍋	6(10.2)	11(16.9)	13(25.0)	22(37.3)	36(55.4)	30(57.7)	14(23.7)	19(29.2)	19(36.5)
	n.s.			1歳時* <			n.s.		
フライパン	6(10.5)	10(16.9)	21(41.2)	28(49.1)	26(44.1)	21(41.2)	13(22.8)	12(20.3)	28(54.9)
	1歳時 < 3歳時			n.s.			1歳時・2歳時 < 3歳時		
コンロ	8(14.3)	12(17.1)	11(21.6)	21(37.5)	30(47.6)	35(61.4)	6(10.7)	15(21.4)	16(31.4)
	n.s.			1歳時 < 3歳時*			1歳時 < 3歳時		
レンジ	9(14.5)	17(23.9)	12(25.0)	22(35.5)	43(60.6)	24(50.0)	3(4.8)	6(8.5)	2(4.2)
	n.s.			1歳時 < 2歳時			n.s.		
まな板	1(1.8)	2(3.0)	2(4.1)	23(41.8)	38(56.7)	25(51.0)	5(9.1)	13(19.4)	24(49.0)
	n.s.			n.s.			1歳時 <		
包丁	0(0.0)	0(0.0)	7(14.9)	19(38.8)	31(48.4)	27(57.4)	4(8.2)	14(21.9)	20(42.6)
	1歳時・2歳時 < 3歳時			n.s.			1歳時 < 3歳時		
テーブル	22(29.3)	14(16.3)	10(15.9)	43(57.3)	36(44.4)	33(48.5)	23(30.7)	52(60.5)	38(60.3)
	1歳時* >			n.s.			1歳時 < 2・3歳時		
食器棚	1(2.0)	4(5.1)	4(6.6)	35(68.6)	32(40.5)	28(45.9)	0(0.0)	9(11.4)	20(32.8)
	n.s.			1歳時 > 2歳時			1歳時 < 3歳時		

表4 各年齢時のままごと道具の社会的用途・機能による異なるふり頻度多群の度数と *有意傾向あり

ままごと遊具	単独の異なるふり 1歳時 2歳時 3歳時	他の1つとの異なるふり 1歳時 2歳時 3歳時	他の2つ以上と異なるふり 1歳時 2歳時 3歳時
茶碗	31(41.3)16(18.8)11(16.9) 1歳時 > 2・3歳時	55(73.3)36(42.4)20(30.8) 1歳時 > 3歳時	21(28.0)29(34.1)15(23.1) n.s.
カップ	43(54.4)23(26.7) 4(6.6) 1歳時 > 2・3歳時	53(67.1)39(45.3)21(34.4) 1歳時 > 3歳時	16(20.3)23(26.7)10(16.4) n.s.
湯呑み	36(47.4)29(33.3)11(18.0) 1歳時 > 2歳時	52(68.4)36(41.4)23(37.7) 1歳時 > 2・3歳時	7(9.2) 19(21.8)15(24.6) 1歳時 <
スプーン	38(48.1)20(24.1)10(16.9) 1歳時 > 2・3歳時	40(50.6)39(47.0)26(44.1) n.s.	8(10.1)19(22.9) 9(15.3) 1歳時 < 2歳時*
フォーク	20(26.7) 6(8.6) 5(10.9) 1歳時 > 2歳時	39(52.0)27(38.6)23(50.0) n.s.	6(8.0) 14(20.0) 6(13.0) n.s.
お玉	26(56.5)22(42.3) 6(17.6) 1歳時 > 3歳時	26(56.5)28(53.8)10(29.4) > 3歳時	4(8.7) 8(15.7) 3(8.8) n.s.
しゃもじ	11(29.7)14(32.6) 5(20.8) n.s.	17(45.9)25(58.1)10(41.7) n.s.	4(10.8) 10(23.3) 3(12.5) n.s.
皿	53(67.1)32(35.6)12(18.2) 1歳時 > 3歳時	57(72.2)43(47.8)17(25.8) 1歳時 > 3歳時	31(39.2)40(44.4)16(24.2) 2歳時 > 3歳時
ポット	36(58.1)29(37.7)11(20.8) 1歳時 > 3歳時	44(71.0)32(41.6)20(37.7) 1歳時 > 2・3歳時	10(16.1)16(20.8) 3(5.7) 2歳時 > 3歳時*
ポットの蓋	7(16.3) 7(10.9) 6(15.0) n.s.	25(58.1)25(39.1)16(40.0) n.s.	2(4.7) 4(6.3) 5(12.5) n.s.
両手鍋	20(37.0)14(24.6) 4(10.0) 1歳時 > 3歳時	29(53.7)26(45.6)16(40.0) n.s.	5(9.3) 16(28.1) 6(15.0) 1歳時 < 2歳時
鍋の蓋	23(34.3)15(20.5) 6(12.0) 1歳時 > 3歳時	45(67.2)34(46.6)16(32.0) 1歳時 > 3歳時	2(3.0) 11(15.1) 5(10.0) 1歳時 < 2歳時*
片手鍋	36(61.0)23(35.4) 6(11.5) 1歳時 > 3歳時	38(64.4)34(52.3)16(30.8) 1歳時 > 3歳時	4(6.8) 8(12.3) 5(9.6) n.s.
フライパン	30(52.6)15(25.4) 9(17.6) 1歳時 > 3歳時	34(59.6)31(52.5)17(33.3) 1歳時 > 3歳時	5(8.8) 8(13.6) 2(3.9) n.s.
コンロ	21(37.5)13(18.6) 2(3.9) 1歳時 > 3歳時	31(55.4)30(46.9)23(40.4) n.s.	2(3.6) 13(18.6) 5(9.8) 1歳時 < 2歳時
レンジ	35(56.5)36(50.7)15(31.1) 1歳時 > 3歳時	46(74.2)23(32.4)20(41.7) 1歳時 > 2歳時	2(3.2) 13(18.3) 6(12.5) 1歳時 < 2歳時
まな板	18(32.7)16(23.9) 8(16.3) 1歳時 > 3歳時*	33(60.0)31(46.3)18(36.7) 1歳時 < 3歳時	5(9.1) 12(17.9) 14(28.6) n.s.
包丁	26(53.1)20(31.3)10(21.3) 1歳時 > 3歳時	31(63.3)34(53.1)14(29.8) 1歳時 > 3歳時	5(10.2) 12(18.8)12(25.5) n.s.
テーブル	42(56.0)46(53.5)19(30.2) 1歳時 > 3歳時	38(50.7)47(54.7)27(42.9) > 3歳時	4(5.3) 19(22.1) 6(9.5) 1歳時 < 2歳時
食器棚	24(47.1)43(54.4)27(44.3)n.s.	30(58.8)40(50.6)26(42.6)n.s.	3(5.9)14(17.7)10(16.4)n.s.

表5 ままごと道具のふりといえない扱いと象徴的扱いにおける頻度多群の度数と% *有意傾向あり

ままごと遊具	ふりといえない操作			象徴的		
	1歳時	2歳時	3歳時	1歳時	2歳時	3歳時
茶碗	22(29.3)	54(63.5)	36(55.4)	2(2.7)	5(5.9)	6(9.2)
	1歳時 < 2歳時			n.s.		
カップ	23(29.1)	57(66.3)	33(54.1)	0(0.0)	1(1.2)	6(9.8)
	1歳時 < 2歳時			1歳時 < 3歳時		
湯呑み	25(32.9)	53(60.9)	34(55.7)	0(0.0)	1(1.1)	11(18.0)
	1歳時 < 2歳時			1・2歳時 < 3歳時		
スプーン	27(34.2)	51(61.4)	32(54.2)	2(2.5)	4(4.8)	2(3.4)
	1歳時 < 2歳時			n.s.		
フォーク	24(32.0)	45(64.3)	31(67.4)	0(0.0)	2(2.9)	1(2.2)
	1歳時 < 2歳時			n.s.		
お玉	12(26.1)	32(61.5)	18(52.9)	2(4.3)	1(1.9)	4(11.8)
	1歳時 < 2歳時			n.s.		
しゃもじ	17(45.9)	20(46.5)	7(29.2)n.s.	0(0.0)	1(2.3)	0(0.0)n.s.
皿	16(20.3)	55(61.1)	45(68.2)	2(2.5)	7(7.8)	9(13.6)
	1歳時 < 2歳時			1歳時 < 3歳時		
ポット	19(30.6)	47(61.0)	31(58.5)	0(0.0)	2(2.6)	3(5.7)
	1歳時 < 2歳時			n.s.		
ポットの蓋	15(34.9)	47(73.4)	11(27.5)	0(0.0)	1(1.6)	1(2.5)
	1・3歳時 < 2歳時			n.s.		
両手鍋	17(31.5)	42(73.7)	18(45.0)	0(0.0)	0(0.0)	4(10.0)
	1歳時 < 2歳時			< 3歳時		
鍋の蓋	18(26.9)	49(67.1)	28(56.0)	0(0.0)	0(0.0)	4(8.0)
	1歳時 < 2歳時			< 3歳時		
片手鍋	20(33.9)	42(64.6)	26(50.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(5.8)
	1歳時 < 2歳時			< 3歳時		
フライパン	13(22.8)	37(62.7)	31(60.8)	0(0.0)	2(3.4)	2(3.9)
	1歳時 < 2・3歳時			n.s.		
コンロ	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)n.s.	1(1.8)	0(0.0)	0(0.0)n.s.
レンジ	9(14.5)	47(71.2)	35(66.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(4.2)
	1歳時 < 2・3歳時			< 3歳時*		
まな板	20(36.4)	34(50.7)	30(61.2)	0(0.0)	11(16.4)	12(24.5)
	1歳時 < 3歳時			1歳時 < 3歳時		
包丁	19(38.8)	31(48.4)	30(63.8)	1(2.0)	3(4.7)	7(14.9)
	1歳時 < 3歳時			< 3歳時		
テーブル	18(24.0)	50(58.1)	33(62.4)	0(0.0)	4(4.7)	5(7.9)
	1歳時 < 2歳時			1歳時 < 3歳時*		
食器棚	4(7.8)	53(67.1)	41(67.2)	0(0.0)	7(8.9)	9(14.8)
	1歳時 < 2・3歳時			1歳時 < 3歳時		